

満洲日系大学の戦後同窓会に関する  
歴史社会学的考察 (3)

——各同窓会における満洲記憶について——

韓 美 怡

〈目 次〉

序章

第一部 満洲国の高等教育機関とその同窓会——歴史学的概観

第一章 満洲国の高等教育機関政策と高等教育機関

第二章 各教育機関の概要と同窓会の特徴

(以上前々号)

第二部 満洲建国大学とその同窓会

第一章 建国大学の概要

第二章 建国大学とイデオロギー

第三章 建国大学における反満抗日運動

第四章 建国大学の崩壊

第五章 建国大学の同窓会

(以上前号)

第三部 理論的考察

第一章 同窓会報における満洲記憶

第一節 所属組織別で考察された会報

第二節 時代別で反映された内容

## 第二章 日本人同窓生の語りと記憶

### 第一節 満洲大陸に対する語りと記憶

### 第二節 引揚の記憶

### 第三節 思い出、物故者に対する弔意など

## 第三章 中国人同窓生の語りと記憶

### 第一節 反満抗日運動

### 第二節 中国革命に参加する

### 第三節 新中国建設への貢献

## 第四章 他の出自の同窓生の語りと記憶

### 第一節 台湾同窓生の語りと記憶

### 第二節 韓国同窓生の語りと記憶

## 結論

(以上本号)

## 第三部 理論的考察

### 同窓会の語りと記憶再構成

同窓会の歴史に対して史料研究を行う時、普通の歴史研究とは差異がある。一般的な歴史学者はある歴史事件を研究する際、公刊史料など一次史料に基づいて分析する。同窓会活動の過程で残された史料は、ある経験を共有する人々により結成された集団の間に発生した記述である。そのため、出来事に関する語りは、ある集団の成員のみが共有する傾向が表われる。アルヴァックスの集合的記憶論は、「集合的記憶」と「個人的記憶」を論じているが、同窓会の語りと記憶の再構成を分析する際に役に立つと考えられる。

集合的記憶論はフランスの歴史社会学者アルヴァックス (Maurice Halwachs) により提出された。アルヴァックスによれば、人間は自分自身が「理性」を備えている。人間が緊密に社会に依存するのは、その「理性」、す

なわち自分自身の意識に従って決定するからである。20世紀初頭、彼は社会変化の過程で、西ヨーロッパの貴族、青年または異なる世代間の関係を考察したことがあった。さらに、彼は出来事の経験者である高齢者の社会上の機能、出来事に対する語り、および彼らの人間関係を分析した。従って、彼は「社会的連続性」を理解した。すなわちアルヴァックスによれば、ある「共同意識」の中に、人間は固有な時間と連節できる形式（伝統、過去に対する崇拜など）を通じて人間社会の秩序と進歩を喚起すると述べている<sup>1)</sup>。

満洲日系高等教育機関の戦後同窓会の史料を考察する際、同じ同窓会において異なる同窓生集団で異なる記憶が共有されていることが確認された。それにも関わらず、同じ同窓会では「集合的記憶」が各構成員に共有されていた。本論文の第三部では、日本、中国、台湾および韓国など出自が異なる同窓生の満洲記憶を分析し、その分析を通じて出自による満洲記憶の着目点と方向性を考察したい。

アルヴァックスによれば、社会における個人的記憶は次のように説明される。「集合的な物であって、周りの多くの人々から刺激を受けており、接触し続ける。例えばそれが我々だけが関与した事や、我々だけが見た事物に関わる物であっても、他の人々によって思い起こされるのである」<sup>2)</sup>。彼によれば、個人的記憶は社会の特徴に影響され、構成されることになる。すなわち、社会的特徴を持つ影響力により組み合わせられるのが集合的記憶であると唱えられた。

満洲日系高等教育機関の戦後同窓会では、その活動を通じて、満洲経験が「集合的記憶」として記述され、各国の同窓生集団と日本同窓会との数十年間の交流活動を通じてさらに「集合的記憶」が適用されていた。同窓会が発行した会報、会誌、回想文集には、出来事に関する語りを通じて、集合的記憶が反映されていた。他方、ある同窓会会員である同窓生が自分自身の立場で出版した個人回想録は、その集団内の個人としての「個人的記憶」であっ

1) モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年、1-4頁。

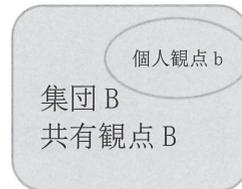
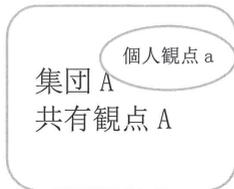
2) 前掲2頁。

た。アルヴァックスによれば、人間は必ずしも自分の目で見ているものを信じているわけではない。つまり、思い出す瞬間には、我々は心の中の記憶と他人の記憶に依存する<sup>3)</sup>。

同時にアルヴァックスは「記憶の再構成」という概念を提出した。すなわち人間は古い場所への訪問を通じて、ある場所の記憶を「再構成」するだろうと指摘した。訪問は、頭に残された記憶とは対照的となった。このような比較を通じて、人間は全体として自分自身の「記憶」を「再認識」をすることができる。従って、他人の記憶は、我々自身の記憶の基礎となり、最終的には「記憶の再構築」に達することになる<sup>4)</sup>。

この点で、アルヴァックスの「個人と他の人が一緒に旅行する」という提言は、彼のいう「個人と他の人が共有する記憶」と集合的記憶とが個人的記憶に対して有する影響を具体的に説明する。アルヴァックスによれば、個人が異なる人々と一緒に旅行する機会がある場合、その過程で、仲間のアイデンティティが異なるため、いくつかの異なる集団が形成される。すなわち個人は集団 A で視点 a を形成し、同じく集団 B で視点 b を形成する。もしある個人がずっと集団 A にいて、集団 A の成員とのみ活動すると、自分自身の視点を形成できず、集団 A の成員のみが共有しうる視点を形成する。

上述の内容は、以下のような図で示される。



3) 前掲 1 頁「我々が常時求めることのできる証人の第一は、他ならぬ我々自身である。ある人が『私は自分の目が信じられない』という時、その人はその人自身のうちに二つの存在があることを感じている。[中略] その見てきたばかりのことを証言する証人として存在している。これに対してもう一方私は、現に見はしなかったがおそらく以前に見たことがあり、おそらくまた他人の証言に依拠してそう考えたのである。」

4) 前掲 16 頁。

集合的記憶や個人的記憶も逆効果になる可能性がある。個人がある集団から離れることと共に、忘却が発生する。アルヴァックスは、この場合、過去の事実の記述と説明が集合的記憶および個人的記憶にとって価値があると主張する。特定の事柄を想起する際に、想起に関与するすべての人が特定の事柄を正確に想起できない場合でも、問題の一般的な状況は、特定の一連の語り・記述から推測することができる。過去の事実の記述と説明は、個人的記憶を補完する。意識は主観的であるため、人間の記憶にはある程度の選択性が反映されている。選択の発生条件は、一般的に個人の精神世界に基づいている。個人の見た現実とは心の中の概念と矛盾するかもしれない、それは誤った記憶を生み出すかもしれない。その時、証人の証言および他の人の記憶は、個人的なフィクションを修正することができる<sup>5)</sup>。

その結果、アルヴァックスは「共同集団内共同成員により保留された共同記憶」の存在を主張し、それを「共同的再構成」と呼んだ。「共同集団」には、一定の時限性と継続性が反映される。「共同集団」では、成員間でも意見が異なる場合がある。たとえば、より大きな集団には、成員Aだけでなく、Aの友人と非友人がいる。Aを評価する際、関係の影響を受けて、Aの友人はAに対して肯定的な観点を持つ一方、Aの非友人は否定的な見解を持つかもしれない。

上述の内容を図で示すと次のようになる。



5) 前掲 48-49 頁。

例えば、建国大学の同窓会集団では、日本人同窓生は作田荘一副総長について、一般的に積極的な語りで記述していたが、中国人学生は民族のおよび政治的立場により、作田副総長に対して中立的、あるいは否認的な態度を持っていた。作田副総長は日本人学生の上長と看做され、尊敬されていた。しかし、中国人学生は日本人学生と同じ感想を持たず、建国大学同窓会の集団に入らず、他の集団に投身し、そこで新しい、彼らの精神世界にもっとも適合的な記憶を形成した。従って、戦後中国側の回想文集では、建国大学在学中の出来事を回想する際、彼ら自身が参加した反満抗日運動とマルクス主義の受容過程を語った。

アルヴァックスは、以上のように、「共同的再構成」をダイナミックに認識した。ある個人は、自分の生活と共に、自らの記憶を再構成する。例えば、建国大学の中国人同窓は、日中国交正常化の直後、すなわち 1970 年代から、積極的に建国大学の戦後日本同窓会に参加した。彼らは日本側の同窓と交流して、経済活動など諸事業で活躍した。しかし 1990 年代に至ると、中国では天安門事件の影響で政治的環境が厳しさを増し、海外への交流活動も減少した。従って、1990 年代に出版された建国大学中国人同窓生の回想文集では、1980 年代の状況と一変し、建国大学の教育に対して消極的な評価が盛んとなった。さらに、1990 年台の会誌を見ると、中国人同窓と日本人同窓との交流活動も下火となった。

アルヴァックスは自伝的記憶と歴史的記憶という対照的な概念を提出した。彼によれば、自伝的記憶は個人的記憶に属し、歴史的記憶は社会的記憶に属する。個人的記憶は、社会的記憶とは明らかに対照的となることがある。満洲国における日系高等教育機関の戦後同窓会では、様々な交流活動の組織化、母校の歴史の記述および同窓会記念文集の刊行などが、それらの同窓会集団に属する社会的記憶として存在している。一方、個人回想録など個人的語り記録された出版物では、それらとは反対に、個人的記憶が示している。そして、アルヴァックスは次のように主張している。「もし私がこうした出来事の思い出をすっかり完全に再構成しようとするれば、集団のあらゆる成員の中でこの出来事をめぐってなされた、歪められ部分的でしかない再

現のすべてを、比較しなければならないであろう。反対に、私の個人的想い出はすっかり私のものであり、全てが私の中に生じたものである」<sup>6)</sup>。

アルヴァックスは、歴史的または国民的出来事は、個人的記憶に時系列を提供しながら、外部から個人的記憶の引証基準となった<sup>7)</sup>。その両者は、現実の層では互いに浸透することが可能である。彼によれば、歴史は「集合的記憶」の一つと看做される。「歴史という集合的記憶のこうした形から、その非人格性や、その抽象的正確さや、その相対的単純性を、つまり、我々の個人的な記憶が依拠することのできる枠をまさに形成しているものを、奪うものである」<sup>8)</sup>。しかし、想起の再構成<sup>9)</sup>に際しては、我々は他人の証言と記述を借用することにより、苦境に陥ることがある。我々は直接的な方式で記憶を喚起するのか、一部の証言に基づいて過去に対して合理的な想像するのか。アルヴァックスは、歴史記述は経験を再構成する際、重要な役割を担うと判断した。

アルヴァックスによれば、人々が過去の出来事を再構築するとき、彼らは記憶そのものではなく、抽象的な知識と個人的な見解に基づいて歴史のギャップを埋めることができる。現実社会の諸要因は、個人的回想に影響を与える。たとえば、国家など広範囲な要因が個人的利益や家族に影響を与えることがある。建国大学のケースを分析すると、逆に反対的な結論を出すこともできる。建国大学の学生の出自はそれぞれ異なっていたが、戦後各自の国家再建と社会思想変化など過程の中で、自らの経験に基づき出来事を記述していた。

アルヴァックスは、集合的記憶と歴史は対立すると主張する。彼によれば、ある歴史事件を経験した集団は、その歴史事件に関する歴史記述を読んできた次世代の人間とは認知上において異なる。その差異は、満洲国日系高等教育機関の同窓会回想文集における語りと次世代である日本史研究者の研究の

6) モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年、48頁。

7) 前掲 52頁。

8) 前掲 56頁。

9) 前掲 72頁。

中に明らかに反映されていた。

アルヴァックスは集合的記憶と歴史の関係について以下のように述べている。彼は、集合的記憶は特定の集団だけに属しており、その記憶も成員のみの意識の中で保存されている。それに反して、歴史は人類の普遍的記憶として姿を現しているが、普遍的記憶というものは存在しない。すべての集合的記憶は空間的にも時間的にも有限な集団によって支えられている。それらの集団は、変化し分裂していくので、我々が同じところにずっと立ち止まり、集団から出て行かなくても、集団の成員は緩慢ないし急速に更新されていき、当初その集団を構成していた人々とはほとんど共通の伝統を持たないような、実質的には別の集団になっていることもある<sup>10)</sup>。建国大学の中国留学生は、1990年代には同窓会という集団の成員として急速に更新され、日本同窓らと共通の伝統を持たないような、日中同窓友好の語りより、在学期間の反満抗日運動に関する記憶を共有する別の集団になっていた。彼らの更新された語りは中国の政治環境と一致し、1990年代には中国政府の指導に従って『回憶偽満建国大学』という回想録文集が出版されたのである。

### 集合的記憶の理論展開と記憶の場理論

ドイツ歴史社会学者ヤン・アスマン (Jan Assmann) とアライダ・アスマン (Aleida Assmann) は、アルヴァックスの集合的記憶理論をさらに発展させた。ヤン・アスマンは「コミュニケーション的記憶」および「文化的記憶」の理論を提出し、「集合的記憶論」を文化学の理論として確立した。

文化学の領域では、記憶は心理学・神経学分野の問題として討論されるのではなく、「文化」、「歴史」などの課題と合わせて考察される。「文化的記憶」とは、現在と距離がある歴史事件および神話に対する記憶を対象とし、特定の時点である集団の記憶の合理性を検討し、その過程でその集団におけるアイデンティティを確保する機能を備える記憶形式である<sup>11)</sup>。

ヤン・アスマンは、アルヴァックスの理論を継承した。彼によれば、集団

---

10) モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、1989年、93-99頁。

11) Astrid Erll, trans. by Sara B. Young, *Memory in Culture*, Palgrave Macmillan, 2011.

による想起、伝統の形成、政治的アイデンティティの確立などは、「文化の連続性の構築」として理解される。そして、文化の存立を可能にする基本的な要件として「記憶」を理解する。この観点から見れば、宗教、神話、芸術、文学など共に、歴史学もまた社会が自らの過去の関係を組み合わせる様々な象徴形式の一つとして、想起の文化の領域に位置づけられる。

アライダ・アスマンの観点によれば、「コミュニケーション的記憶」は我々同世代が共有している記憶であり、時間の流れに従って、新しい記憶も更新されることになる。記憶も媒介の変化と共に「文化的記憶」になる。そこで、各時代の教科書、文献資料のみならず、社会実践の記念物なども、「媒介」として認識される。例えば、遙かな昔に関する慶典・儀式、記念行為などは文化的記憶を具現化する表現として考えられる<sup>12)</sup>。「文化的記憶」においては、自らに属する一連の語り、図像ないし儀式的表現系統があり、この一系列の記号体系を通じて、ある集団のアイデンティティが構築され得る<sup>13)</sup>。斎藤公輔は、コミュニケーション的記憶と文化的記憶の比較を行った。我々は、次の表でその二つの概念を理解することができる<sup>14)</sup>。

	コミュニケーション的記憶	文化的記憶
内容	自伝的枠組みにおける歴史経験	神話的歴史、絶対的過去の出来事
形式	日常的、自然な非形式的	セレモニー、祭り
メディア	個人的の経験、自らの見聞	不変的、伝統的なシンボル
時間構成	現代とともに3-4世代	神話の現時点、絶対的過去
運び手	非特定、想起共同体の時代の証人	専門家化された伝統

まず、ヤン・アスマンによれば、オーラルヒストリーは「コミュニケーション的記憶」の範疇に属する。「コミュニケーション的記憶」は日常的交流において発生し、内容も特定の集団の歴史経験に限定される。従って、記憶の内容にはある程度の集合性が反映される。ヤン・アスマンの「コミュニ

12) 前掲 25-26 頁。

13) 黄曉晨：「文化的記憶」，《国外理論動態》，2006年，第6期，61頁。

14) 斎藤公輔「集会的記憶概念の批判的考察と今後の展望」『ドイツ文学論考』第49号、2007年、62頁。

ケーション的記憶」および文化的記憶の特徴を用いて、戦後同窓会における「コミュニケーション」機能を考察することができる。一方、その観点に立てば、同窓会刊行物、同窓生回想録に反映された語りを通じて、満洲国で受けた高等教育に対する記憶と認識などを分析できる。

アライダ・アスマンは「想起の文化」に「被害者競争」という概念も導入した。彼女によると、政治的な想起の実践には二つの特徴がある。一つは肯定的な出来事よりも否定的な出来事のほうが明らかに優勢であるが、も一つは加害者を想起するよりも被害者を想起するほうが明らかに優勢である。被害者という概念は戦争の死者を自らの決断で犠牲を捧げるような、能動的な英雄もしくは受動的な殉難者に変える。そこでいう対象は兵士と国民全体であると判断される。戦後 20 年以降、ドイツ人の「自己被害者化」という傾向が存在し、被害者として連続的な歴史が再構成された。この理由についてアライダ・アスマンは、拡大する非ユダヤ人のトランスナショナルな想起の共同体によっても、被害者との共感という形で想起が行われていると判断したが、他方で、新しい被害者のカテゴリーが発見されたという。つまり自分たちが犯した罪の被害者もしくは共感的に認知された被害者である。しかし、被害者との共感と並行して、被害者の役割に特権が与えられたことになるという。

アライダ・アスマンは、苦難の被害者という国民の自己像を伴った政治問題も提出した。苦しみが民族化され、それに伴って、社会の多元化が拒絶される。(特に移民やマイノリティに対して、ある社会で完全な承認と参加を獲得するのは難しくなる。) さらに、快適な道徳的立場に立って、歴史上の犯罪や新しい犯罪のいかなる共同責任も免れられる、防護服として使われる。被害者の語りは、政治的な自己演出の一部でもある。西ドイツでは 1945 年以降、「自己被害者化」的な態度が生まれた。これは旧ソビエト圏諸国におけるのと逆の問題であった。ドイツが「被害者」という認識は許さない。この加害者パースペクティブでは、当事者の家族の中でいまだ鮮明に語り継がれてきた思い出を、社会的に承認される形で、共感を持って、第二次世界大戦についてのドイツ人の歴史像に組み込むことはできなかった。その代わり

に、これらの思い出は、自己被害者化の一形式として不信の念をもって遠ざけられ、総じて歴史修正主義という嫌疑をかけられた。

アライダ・アスマンの研究によれば、加害者・被害者の位置関係に対する歴史家の認識には、必然的に繰り返し狭隘化が生じる。なぜなら、記憶を構築する場合、肯定的な自己像を維持したいという根本的な欲求が存在するためである。それゆえ、想起のプロセスで作用しているこの排除の欲望を反省的に認識し、相互の承認と交渉による決着という形式に意識的に移行することが重要である。この場合、目的は記憶の枠組みを拡張することであって、置き換えることではない。人々が具体的な調査結果に関心を抱き、さらにまた、人々が、歴史の経験は著しく多様で多義的であるという重要な認識に関心を抱くことが重要である。それは、記憶と歴史が互いに接近していくことにも繋がるのである。

#### ピエール・ノラの「記憶の場」理論

フランス歴史社会学者ノラ (Pierre Nora) は 1984 年に提出した論文「記憶と歴史の間に」で、アルヴァックスが主張した「記憶」と「歴史」の対照関係について検討した。ノラによれば、「記憶」と「歴史」は語彙の意味を越える。すなわち、記憶は、最終的に歴史へ転化するものであり、この転化は不可逆であると主張した。

ノラの理論では、「記憶」は現在の現象を反映しているが、「歴史」は過去を表す。「歴史」はある程度の普遍性を持っており、誰にも属するが誰にも属しない。一方、「記憶」は、空間、行動、イメージ、オブジェクトなどの具体的な物に根ざしている。記憶は絶対的で純粹であり、歴史は相対性を承認するだけである。アルヴァックスは、特定の集団とその集団の中に共有される記憶の関係を唱える。それを敷衍していえば、終戦後に日系同窓生によって設立された旧満洲日系高等教育機関の戦後同窓会は、主要には日本人同窓生の集団の「満洲記憶」反映している。

同窓会活動、同窓会報・会誌の発行、同窓生名簿の作成、海外訪問など、日本人同窓生の追悼・記念活動は、集団的記憶が具現化する時、「満洲記憶」を再構築すると考えられる。同窓生集団の形成は静的ではない。他の国や地

域の同窓生は日系戦後同窓会への参加により、彼らの属する集団は日本の同窓生の集団とは異なること認識し、異なる「満洲記憶」を生み出した。同窓生活動の内容や形態の変化により、「満洲記憶」が継続的に増殖し、または削除される。このプロセスは、同窓会会報と会誌に投稿された他の国や地域の同窓生の寄稿や、日本国外の同窓会（数は少ない）の活動、そして海外同窓会が刊行した回想文集の中に反映される。

一方、同窓会は同窓生の「満洲記憶」が発生する場所であり、「記憶の場」であると見なすことができる。「記憶の場」となるのは、まずはすべて「遺物」である。ノラが言及したとおり、例えば美術館、資料館、墓地・所蔵品、祭り、記念日、契約書、会議の記録、記念碑、寺院、協会などの場は、記憶の場になることができる。日系同窓会は同窓生が記念活動を行う場所であり、満洲記憶の場と見なされる。ノラは、記憶の場の誕生とともに、自然な記憶はもはや存在しないことを認める。そして、アーカイブを作成し、記念日イベントを維持し、お祝いを行い、葬儀のスピーチを提供し、文書を公証する事などは、記憶の場を維持するために必要であるという意識に基づいていると考えられる。このため、日本同窓生が戦後同窓会を作ろうとする行動は、満洲記憶を置く場所を作って守ろうという意識の現れであると見なされる。しかし他方、この記念意識がなければ、記念すべきものがなくなると満洲記憶もすぐに公式的な歴史によって一掃されてしまう。「記憶の場」が人々の信頼する思い出を守る堡壘であるなら、戦後同窓会は日本人同窓生の「満洲記憶」を守る堡壘である。ノラは、特定の日付や記号を公式的「記憶の場」として指定することができる一方、それらの「記憶の場」は記憶を再構成する源泉として使用できることを指摘した。国民の感情にもとづく本能的な愛着は、人々を形作ったものに対する懐かしさを人々に思い出させる。それとは反対に、歴史的な違和感は、人々がこれらの遺産を冷静に検査することを要求する。同様に、日本と中国や韓国等との国交回復後、戦後同窓会の会員数は拡大し、韓国と中国の同窓生にとって、戦後同窓会は「満洲記憶」の場所であり、「満洲記憶」が生まれる源泉と認識された。戦後同窓会は、異なる国や地域の同窓生集団に「満洲記憶」を遡らせる一方、改めて「満洲記憶」

を生み出す場所をもたらし、他方ではその記憶を再構成する源を提供した。同時に、同窓会という場での接触を通じて感知された歴史的違和感にも注目する必要がある。日本、中国、韓国、台湾などの地域が異なる同窓生たちは、こうした違和感を通じて、「満洲記憶」についてもう一度振り返ってみる必要があると感じたことがわかる。

## 第一章 同窓会報における満洲記憶

### 第一節 所属組織別で考察された会報

満洲日系高等教育機関の戦後同窓会が刊行した会報には、各同窓会組織の特徴と満洲記憶が反映されていた。各同窓会の会報は、その団体の規模や形式によって、内容や書式が様々であるが、基本的には総会活動（会長からの挨拶）、同窓会の現状報告、会員からの寄稿（満洲経験や近況など）、連絡先の登載、名簿の更新、教授・先輩・同窓をめぐる思い出、亡くなった人に対する弔意、懇親会活動、海外訪問活動などで構成されていた。

満洲医科大学の同窓会である輔仁会の会報『輔仁』は、年2回のペースで刊行されていた。『輔仁』の主な目的は、満洲医科大学の同窓らの医学分野での交流活動の場を確保することであった。具体的にいうと、同窓の専門領域での大きな成果を報告すること、医療情報を共有することおよび医学交流を目的とする懇親会活動などである。『輔仁』会報によると、日韓、日中国交回復後、日本側からの『訪韓医学団』や『訪中医学団』などの活動が記録されていた。その訪問団は、同窓との旧交をあたため、海外同窓との医療協力を実現することであった。つまり、『輔仁』に見られる日本側同窓の満洲記憶では、戦争責任など歴史上の省察は少なかった。代わりに引揚の経験、初代会長・幹事長など重要な上長に対する敬意と回想などが頻繁に記録されていた。しかし、中国方面との連絡が拡大してくると、中国同窓の輔仁会活動への関心も増大した。『輔仁』誌上にも中国に関する寄稿が増え、対中友好のシグナルと判断できる事例もしばしば登場した。

旅順工科大学の同窓会は「興亜技術同志会」と称した。興亜技術同志会は戦前から活動していた組織であり、同志会誌『興亜』が刊行されていた。終

戦直後の興亜技術同志会は、同窓生の引揚連絡や同窓生の善後処理の主要機関として機能したが、同窓会誌の刊行にも積極的であった。同志会が最初に着手したのは、名簿の作成である。第 1 回の同窓会名簿は 1947 年に作成され、同志会関係者に配れた。その時の主な目的とは、同窓の安否の確認および同窓間の連絡であった。1948 年に第 1 回同窓会総会が開催され、同窓会名簿が増補された。そのころ、興亜技術同志会の同志会誌『同志会会報』も年 2 回の形で刊行されている。

興亜技術同志会と中国側との連絡は戦後から日中国交回復までの期間にも継続していた。1955 年に興亜同志会の会誌名は『興亜』に戻り、1965 年までこの誌名を使った。会報は、中国人同窓生の意思を汲んで、1965 年に誌名を『旅順』に変更した。旅順工科大学の同窓生は様々な科学技術分野で活躍した。『興亜』および『旅順』では、日本同窓が経営する会社の広告が常に掲載されていた。同窓会会長であった相田秀方は、日本の自動車業界との関係が深かった、同窓会誌は日本同窓のネットワークとして機能し、同窓間の業務上の連携などでも役立った。

ハルビン工業大学の同窓会には総会会報『南崗』があり、各学科による独自の会報も同窓会事務局によって刊行された。まず、ハルビン工大機械科同窓会事務局が刊行した機械科同窓会報は、第 1 期から第 3 期までが『機械科ニュース』と命名されたが、第 4 期から『南崗』と改名した。その他、採鉱・冶金学科や電気学科の同窓会報もそれぞれの学科によって刊行された。事務局の住所から判断すると、機械科同窓会事務局とハルビン工業大学同窓会事務局は同一場所にあったと思われる。ハルビン工業大学の会報は学科に関わらず 1980 年代以降も発刊され、中国側同窓会との連絡が密接であることなども特徴として指摘できる。

新京工業大学の戦後同窓会誌の特徴は数が多かったことである。新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成五十周年記念誌など同窓会総会の機会に刊行された会誌がある一方で、各学科の支部会誌・会報もあった。例えば応用化学科化人会誌『化人』(1977-1997 年)、『化人会報』(1984-2003 年)、『母校創立 60 周年校友聯誼会参加訪中団感想文集』、機械学科『機友会 会員通信抄』

(1991-1999年)、採鉱三期会会報『杏花』(1994-2004)などがある。

## 第二節 時代別で反映された内容

終戦直後から1950年代までの間に満洲日系高等教育機関の同窓会が次々発足し、会誌と会報の刊行も始まった。1950年代から刊行された会報を考察すると、以下のような内容が反映されていることが分かる。まず1950年代の日本同窓会会報には、先に紹介した旅順工科大学同窓会である興亜技術同志会が刊行した『興亜』がある。当時興亜技術会は主に日本国内で活動していたが、会誌に反映されたのは、各国内の支部からの便りであった。満洲経験に関する思い出はたまに登場するが、同志来往・同志短信など同窓情報が多かった。そして、上述のように、旅順工科大学の同窓会報には、会員が経営している会社に関する広告が数ページにもわたって掲載されている。

建国大学の同窓会報もこの頃創刊された。満洲医科大学四十周年記念誌(1952年)も刊行された。そこでは、校歌から始まって、学校の前身であった南満医学堂の回顧、終戦後の満洲医科大学の後日談、学生の生活史など、日本人学生を主とした語りが盛り込まれた。学生・教職員の近況に関する情報の更新も頻繁に行われた<sup>15)</sup>。

1960年代から1970年代までの会報は量が多い。旅順工科大学同窓会編『旅順』があり、旅順工科大学六十年史編纂委員会編『旅順の日』も刊行された。旅順工科大学の同窓会報は、満洲時代の思い出を共有し、同窓往来・情報交換の機能も備えていた。一方、同窓生は興亜技術同志会と旅順工科大学同窓会の名の下に、民間交流の形で、日中国交回復前後に訪中活動を行った。その過程の詳しい内容はすべて『旅順』会報に載せられた。同時期に刊行された同窓会誌としては、満洲医科大学同窓会報『輔仁』がある。さらに、建国大学同窓会編『建大史資料』が刊行された。『建大史資料』には、様々な建国大学関連人物の回想文、講演内容、およびインタビューなどが含まれていたが、本書の刊行は、1980年代に刊行された『建国大学年表』の

15) 輔仁会編、『満洲医科大学40周年記念誌』、1952年。

作成に大きく寄与した。大同学院同窓会の会誌・回想文集もそのころ刊行されている。大同学院史編纂委員会により、『碧空緑野三千里大同学院同窓会』、『大いなる哉、満洲』、『旺なる吾等』、『渺茫としても果てもなし—満洲国大同学院創設五十年』などが編纂された。

1980-1990年代に入ると、日本側の同窓会訪中団の旅行記録が盛んに出版された。海外同窓との連絡が盛んになるとともに、海外同窓に関する記事を載せた会報・会誌が続々刊行された。そのなかには、大同学院同窓会編『友情の架橋・海外同窓の記録—満洲国大同学院創設五十五年記念』（1986年）があり、建国大学在韓同窓会『歡喜嶺』など海外同窓会により刊行された会誌もあった。さらに、日本人同窓生の個人回想録の出版も始まった。例えば、建国大学同窓生である百々和『道芝』、山田昌治『興亡の嵐—建国大学崩壊の手記』などの個人回想録があり、ハルビン学院同窓生小川之夫の『愚直の青春二、一二八日、ハルビン学院—シベリア分校に学んで』などがある。

1990年代に入ると中国側同窓会会誌・会報が刊行されている。その中では、『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』（1997年）（以後『記録』と略）と『回憶偽滿建国大学』（1997年）が目される。『記録』は中国人新京工業大学同窓生の寄稿を編集した回想文集である。『記録』は、もう一つの中国人同窓生回想文集である『回憶偽滿新京工業大学』の内容をも参考にして、1997年に日本語に翻訳された。

2000年以降も同窓会報・会誌の刊行は続いたが、同窓生の高齢化が進み、内容は亡くなった同窓に関する弔意表明や在学時期の思い出が中心となった。個人的記憶と語りは続いた。組織別に記念誌が刊行された場合もあった。大同学院同窓会編『物語 大同学院・民族協和の夢にかけた男たち—創立七十周年記念』、建国大学同窓会編『日本での歩み』、旅順工科大学同窓会編『旅順工科大学開学 90 周年記念：平和の鐘』などがある。個人的記憶では、建国大学同窓生小林金三『白塔—満洲国建国大学』、百々和『道芝折々の記』、斉木道吉『苦楽人生—回首往時』などの回想録がある。

## 第二章 日本人同窓生の語りと記憶

### 第一節 満洲大陸に対する語りと記憶

日本人同窓生の語りは、過ぎた昔の満洲に対して懐かしい感情を満たしながら、満洲国高等教育機関の同窓生としての帰属感とアイデンティティを与えた。

過ぎた昔の満洲における学園生活について、人によって感情が異なる。ハルビン学院の同窓生である小川之夫は、満洲について次のように語っている。「奉天に下車しましたがプラットフォームはものすごい雑踏で満人の放つ悪臭に少なからず（中略）言葉は無論通じません。」<sup>16)</sup> 小川は、中国人を「満人」と呼び、彼らの衛生管理に対して強い言葉で批判していた。「まして一年に一回か数年に一回位しか風呂に入らない満人が、ありとあらゆる闇の物を売っている所です」<sup>17)</sup>。

しかし、彼の回想録では、ハルビン学院および北満に対する態度が一変し、むしろ積極的に評価している。「新京は大変静かな、内地とちっとも変わらない街のようです。第一、駅の近所は満人もいないため、奉天と比べるとずっと清潔です。（中略）ハルビン（中略）は、さほど寒いとも感じませんでした。駅前も木があって一層小ぢんまりとした住み良さそうな所でした」<sup>18)</sup>。ハルビン学院に対しては、小川は次のように回想していた。「私の想像以上に当学院は家族的なものでした。その綱領にある通り『北方に挺身する国土の養成』ですから真に気持ちの良いもので、他の学校にあるような、上級生対下級生および同学年中でも他級とのいがみ合いは全然ありません」<sup>19)</sup>。小川は、ハルビン学院の学生としての使命感を持っていた。彼は、ハルビン学院の使命について、1944年に家族に送った手紙で次のように書いていた。「ロシアの現在の状態に飽きたらぬ、すなわちロシアは今国境を閉ち鎖国の状態にあるのですが、それを武力的に打破するか、または平和的

16) 小川之夫『愚直の青春二、一二八日、ハルビン学院—シベリア分校に学んで』、恵雅堂出版、1988年7月7日、28頁。

17) 前掲30頁。

18) 前掲37頁。

19) 前掲39頁。

に解決するか、(中略) その国策に沿って第一線に立つ人材を養成するのです。国土、志士の養成ですから地味かもしれませんが厳格です」<sup>20)</sup>。ハルビン学院の生活の中で、彼は「学院のものは日本国民であると同時に満洲国民であります」<sup>21)</sup> というアイデンティティを確立した。

ハルビン学院の学生のみならず、満洲国における高等教育機関の日本人同窓生は、ともに軍事訓練、開拓団での見習い、勤労奉仕、学徒出陣など同じ出来事を体験した。それらに関する語りは、戦後の個人回想録・同窓会刊行物では、紙面を賑わしている。軍事訓練については、小川は次のように心理的状态を表していた。「満洲といえば、我大陸政策の基礎的な中心地帯であり、同時に、モスクワ政府の東亜政策遂行の前衛的基礎地帯であって、殺伐の風みなぎり、人類の文化中心地から遠くかけ離れた未開辟地の荒野として忘却の彼方である。(中略) 北満の野に我勇士の姿をと仰ぎ、邦人の活躍を眼のあたり観ずる時、我も真に北辺鎮護の任に当らん念に借り立たれる」<sup>22)</sup>。ハルビン学院の学生として、夏休みの時彼は終日グライダー訓練を受けていた。「[1944年] 6月より向ふ2ヶ月、滑空訓練があります。この訓練と申しますのは、凡そ一年全部と二年、三年の若干名の方が当学院より受けるわけであります。(中略) それとて人が思ふ程苦しくはないと思ひます」<sup>23)</sup>。

さらに、建国大学の同窓生は戦後の回想録で、1942年に始まった建国大学の現地訓練について次のように語っている。「(前略) さらに『訓練課題』が記され、『帰校と同時に、(一) 建国理念が如何なる程度に青年層に浸透しおるや(二) 民心を如何にして把握するや、について報告書を提出せしむ』とあった。(中略) 朝鮮系の金田光郎はずっとん狂な声をあげた。『なによ、これ。主語がはっきりしとらんし、以て、もって、もってと、何度言えば気がすむんだ。』日本人学生である小原〔広〕は『冬休みは削られるのかな。

---

20) 前掲 40 頁。

21) 前掲と同じ。

22) 前掲 66 頁。

23) 前掲 63 頁。

しかし田舎に入れるのは、いいな。』って、金田は『殉国挺身の熱烈なる指導者として、俺たちが訓練されるのかと思ったら、どうも違うようだ。』『つまりだ、身を挺して国に殉ずる強い使命感を持つような人物を養成せよ、ということなのだ。未熟な俺たちに、そんなことできるはずないじゃないか。こっちの方こそ、訓練されたいものだ』<sup>24)</sup>。

開拓団については、建国大学同窓生の回想録では、「開拓団の矛盾」が語られていた。「極端な農村の疲弊、諸政の錯綜、物資の欠乏そして人材の不足。理想と現実とのギャップに苦悩しつつ建設に携わる陰の人々……第一線の人々……の悲壮にも崇高な現実を目のあたりに見る」<sup>25)</sup>。

学徒出陣について、小林は次のように回想した。「〔1943年〕10月も半ばを過ぎる頃になると、日系の学徒出陣への覚悟も定まったためか、騒然とした空気は静まり、大学キャンパスは検挙事件以来しばしの沈然に閉ざされた。反満抗日学生が検挙されたときには、各民族とも事態の收拾を願いながら沈黙した。こんどは各民族はそれぞれ異なった感慨の中にこもった。日系は自分自身の立場を戦場の死と結びつけ、満系ら非日系学生は身辺にただならない圧迫を感じとって、誰もが不安を隠せないでいた」<sup>26)</sup>。彼は、学内における民族学生それぞれの蠢動に対して語っている。一方、ハルビン学院の小川は、回想録の中で、1944年の「サイパン玉砕」の報に接したときの、戦時中の教育を受けた18歳の少年の衝撃と悲憤について述べている。「私達は今二つも三つもの中から一を選ぶという余裕を持っていない。事態は急迫しているのです。盲目的な信頼、盲目的な服従、それ以外になにもないと思います」<sup>27)</sup>。

## 第二節 引揚の記憶

満洲日系高等教育機関戦後同窓会の刊行物を考察してみると、満洲経験に

24) 小林金三『白塔—満洲建国大学』、新人物往来社、2002年、12-14頁。

25) 前掲156頁。

26) 前掲330頁。

27) 小川之夫『愚直の青春二、一二八日、ハルビン学院—シベリア分校に学んで』、恵雅堂出版、1988年7月7日、81頁。

関する記述、および日本同窓会の何十年にもわたる交流活動の内容と形式が「集団的記憶」の理論に非常によく当てはまる。この範疇に従って、所属組織別の同窓会会報・会誌、回想文集を考察すると、引揚げの出来事については特に集合的記憶の理論が妥当する。

一部の同窓は日本人の立場で終戦直後に受けた深い精神的・肉体的な苦痛について語っている。例えば「居留民会」、「ソ連軍の暴行」、「開拓団の戦後受難」などである。新京工業大学の同窓会刊行物を考察すると、引揚げについて多く記録されている。「既に私たちの耳にはソ満国境の開拓団では、ソ連の侵攻に抗戦する武器もなく、空襲を受け、戦車に追われ、逃れ切れないと集団自決したり、避難中次々に斃れる人達を断腸の思い出置き去りにしなければならなかったなどなど、痛ましい悲劇が数々伝わっていた」<sup>28)</sup>。

一方、一部の日本人同窓生は戦争に巻き込まれ、軍隊に入隊した。建国大学の卒業生である百々和は、終戦後軍事教官として、中国側の国民党軍に留用され、中国共産党軍と戦った経験があった。中国で抑留生活 12 年間を経て、最後に復員帰国したのが 1956 年のことである。彼は自分の回想録である『道芝』で、その時の出来事について次のように述べている。「軍事教官として中国側に留用されていた私は、こんな歌を歌いながら、麦秋に美しく彩られた山西の黄土地帯を、戦場から戦場へとかけずり廻り、世界の視聴をあつめてたたかわれた国共闘争の渦中に巻き込まれていった」<sup>29)</sup>。彼は、自分を昭和の浦島太郎に譬え、次のような語りを通じて、その過程で感じたことを述べている。「昭和の浦島太郎は抑留生活で人間らしく苦しんだかわりに、二つの『眼』をお土産に持って帰った。一つは、社会主義の現実に対する批判『眼』であり、もう一つは資本主義に対する批判『眼』である。第一の『眼』は、中共軍との戦いの中から、そして又抑留生活における苦悶、敵対、反抗、妥協、理解の過程の中から、各自それぞれの持味を持って掴んだ

---

28) 野口英三郎(探鉱三期)・「密山からの脱出」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌 北辰高く一青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、270 頁。

29) 百々和『道芝』、三和書房、1983 年、3 頁。(原稿は昭和 33 年(1958 年)『緑樹』六号に載せられた。)

自分の『眼』である。(後略)」<sup>30)</sup> 彼によれば、引揚前の中国での戦争経験は、中国共産党が唱える社会主義の真実を明かした。彼は以下のように語る。「中国における社会主義への現実、破壊と殺戮、絶望と狂喜に満ちた真剣にして悲惨な凄まじい過程であり、それを代償として建てられた社会主義の現実、天国でも極楽でもなく、矛盾と困難にぶつかっている。(後略)」<sup>31)</sup>

さらに『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌』を見ると、シベリア抑留された同窓の思い出が収録されている。例えばある同窓は、日本兵としてソ連に抑留された時の心理状態を次のように述べている。「希望を失い不安におののく日本兵は、今を生きるために徹底して自己中心とならしく、戦友の食糧や持ち物を盗む、仮病をつかって労役をさぼる、中には前歴や階級を偽称しているような者まで出る始末。自暴自棄に陥って次第に統制が取れなくなり、やがて強制労働が課せられるようになると、(中略)寒さと劣悪な食事に加えて不馴れな労働で体力を失い、就寝中に死亡している者、栄養失調で倒れて病院に送られる者等が出てきた」<sup>32)</sup>。

### 第三節 思い出、物故者に対する弔意など

日本側の同窓生は、同窓会の運営だけでなく、慰霊祭、寮歌祭、旧満洲を中心とした訪中団、周年記念日などの祝い事や記念活動などを行っていた。満洲記憶に対しては、思い出、亡き人についての弔意などが記載されていた。彼らの語りは、「記憶の場」として、満洲記憶を保護し守る機能を有したことを示している。

#### その一：上長に対する思い出

日本同窓会の同窓生らは、常に学長または重要な上長に関する思い出を語りながら、学生時代の記憶を同窓会集団で共有している。

新京工業大学の同窓生は戦後同窓会回想文集には、国立満洲工鉦技術員養

---

30) 前掲 5 頁。

31) 前掲と同じ。

32) 星野達夫「敗戦、そしてシベリヤ抑留の日々」、『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌 北辰高く一青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、261-262 頁。

成所の時代の要人から始め、学長に対する思い出などが紙面に記録されている。例えば、「わが師わが恩」という回想文は国立満洲工鉦技術員養成所初代所長皆川豊治、および新京工業大学と改称した後の初代学長武村清について以下のように語っている。「〔皆川豊治は〕坊主がりでゴマ白、色黒の温厚な紳士であり、二、三回訓話を拝聴した記憶がある」<sup>33)</sup>。「〔武村清は〕満洲技術界の大先輩格の方であり、技術の最高学府新京工業大学にふさわしい学長を迎えたわけである。貴公子然とした風采、対話の妙、温かみが学長室にただよっていた」<sup>34)</sup>。さらに「学長語録」という文章を寄稿した日本人同窓もいた。土木 6 期の倉迫一孝は新京工業大学二代目学長である長谷川の語録を次のように記している。「その一『愚の骨頂』（中略）昨日の水泳大会で、命懸けで潜水競技に優勝した行為は、無事助かったものの、あのようなことに命を懸けるなど『愚の骨頂である』と言われた。当時戦時下の風潮として、身を挺して勝利を勝ちとることこそ最上の行為とされていたので、大いに誉められるものと全員が思っていたのに、意外な学長の訓話に戸惑いを感じたものだった。（中略）話の内容はともかく、訓話の中に出た『愚の骨頂』という言葉が、その後学生の間で流行語となった」<sup>35)</sup>。

満洲医科大学の同窓生や戦後輔仁会の歩みにとって重要な人物についても、会報・会誌でしばしば語られた。満洲医科大学の場合は、輔仁会に大きな奉獻をした伊藤尹について多くの記録が残されている。同窓生の語りには、次のような情緒的な内容が多く見られる。「敗戦により母校を失い、全く着のみ着のままの同窓生が（中略）数多くの後輩たちに嫌な顔一つせず、卒業生に対しては就職の、学生に対しては転入学のそれぞれのお世話をしてくださった事は、同窓生が等しく認め、今日もなお忘れえないものであろう」<sup>36)</sup>。

---

33) 相馬恒雄「わが師わが恩」『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌 北辰高く一青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、94 頁。

34) 前掲と同じ。

35) 倉迫一孝、「学長語録」『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成 50 周年記念誌 北辰高く一青春の新京時代と追想の日々』1998 年 12 月、197-198 頁。

36) 前原裕「戦後の輔仁会を語る」、『柳絮地に舞ふ（追補）—戦後の輔仁会』（1984 年）34-36 頁。

「戦後混乱期の善後処理は伊藤尹先生の愛校心からスタートしている。学生の引揚と学業中途の学生の転入学などの問題について努力した」<sup>37)</sup>。「戦後の輔仁同窓会は伊藤病院から始まる（中略）満洲よりまた戦地より哀れな姿で日本へと目指して引き上げてきた（中略）満洲医科大学という一つの団体としての大学、同窓会の日本での基地は伊藤病院であった。そしてその中に戦後いち早く設置されたのが満大善後処理事務所であった」<sup>38)</sup>。などなど。

#### その二：物故者に対する弔意

満洲高等教育機関の戦後同窓会により刊行された会誌では、時期にかかわらず、在学中、抑留中、ないし戦後に亡くなった同窓および上長に対する弔意の寄稿が掲載されている。亡くなった同窓に代わり、物故者の家族が同窓会報に寄稿して事情説明する場合も多い。

同窓会は終戦直後、あるいは在学中に亡くなった学生の日記を編集して出版する仕事も行なった。建国大学の場合、森崎湊の日記を編集した『遺書』および藤井歓一『ひたぶるに真実に：藤井歓一建大日記抄 その他』がある。

### 第三章 中国人同窓生の語りと記憶

#### 第一節 反満抗日運動

上述したように、日本人同窓生は、同窓会創設、回想録出版、慰霊祭や弔辞など様々な活動を通じて満洲記憶を保存していた。しかし、中国人同窓生など非日本人同窓生は、自らの同窓会を組織することはなかった。日本における戦後同窓会という「記憶の場」には、日本人学生のみ「満洲記憶」が反映されていたと言える。之に対し、中国では、満洲記憶を保存しうる「記憶の場」は、日本と異なり、満洲経験に関する否定的な語り（反満抗日運動）や、彼らが満洲で行った革命活動に対する回想の中にあつたと考えることができる。

#### その一：抗日グループおよび「北満執委部」事件

37) 前掲の資料と同じ。

38) 熊田正春「戦後輔仁会の功労者伊藤先生」、『柳絮地に舞ふ（追補）一戦後の輔仁会』（1984年）2-8頁。

抗日グループとは「北満執委部」(中国共産党北満省委員会の抗日救国会チチハル分会)の指導によって設立された抗日グループである。中国戦後同窓会が刊行した『新京工業大学中国校友記事』は、1987年2月28日に黒龍江省委組織部による審査を受け、1987年(第9号)中国共産党黒龍江省委員会組織部の文献資料を参照しつつ、抗日グループについて次のように記録した。

『北満執委部』は1937年7月、抗日連軍第三路軍軍医で、中国共産党員であった王輝鈞同志が進歩的な大衆と愛国の志ある人々とともに組織した一つの非合法団体だった。成立した後、しばらくして抗日連軍第三路軍と連繋を持つことができた。そして抗日連軍第三路軍の指導と支持のもとに抗日救国活動を展開した。しかし同年11月、「執委部」に所属する各グループは侵略者による組織破壊の攻撃に遭い、多くのメンバーが逮捕され、また主なリーダーは正義のために死んだ<sup>39)</sup>。「執委部」の設立当初に参加した新京工業大学の学生は唐昆、張世誠、姜国思、韓福慧、薛鴻超の5名であった。新京工業大学の学生読書会の中で、学生らは明確な政党傾向を持っていなかった。しかし、読書会幹部である彼らが共産党の地下組織である「北満執委部」との緊密な連絡があるのは事実であった。当初の状況は『記事』で次のように記述されている。

「1940年冬には、読書会の活動はすでに盛り上がっていた。熱血に燃える青年はみんな進歩的書物を読むだけでは不満で、ポスターを貼ったり、ビラを撒いたり、思想より以上に有力な実力行動で反満抗日のデモンストレーションを行った。財務職員養成所の常吉らの3名は、満軍の武装程度を掌握しようと「満洲国軍官学校」に入学した。またその頃、高旭征は内山書店から日本の雑誌『改造』を買って帰り、エドガー・スノウの延安の記事や日本語版の艾思奇の『大衆哲学』などの文章が掲載されているのを読んで、共産党が指導する中国革命に憧れを抱き、東北抗日連軍との連絡を持ちたいと考えるようになった。張東人は日本侵略軍の火薬庫を爆破しようと思ったこと

---

39) 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997年、42-43頁。

があった。唐昆は抗日のために武装闘争がいけないことではないと考えた。1941年初め、1期の卒業生の就職に際し、満洲国治安部は卒業生が必要だと考え、係員を学校に派遣してきた。その時、唐昆は時期が到来したと思い、自分で望んでハルビンの満洲国江上軍司令部工務科建設部に就職し、建築技師に任ぜられた。唐はハルビンについてのち、直ちに満軍の中に反満抗日の組織を発展させ、またハルビン工大の読書会のメンバーであった張徳鄰（高芳）、劉長春らとの連絡をとった<sup>40)</sup>。

ここで明らかなように、「読書会」は、建国大学、または新京工業大学のみに設立された学生組織ではなく、満洲国における高等教育機関で普遍的に存在した学生組織であった。一部の組織は中国共産党の地下情報組織と緊密に連絡していた。『記事』では、新京工業大学学生と他大学の学生との協力について次のように述べている。

「ハルビン工大生の孟双全は史履升など執委部メンバーと度々密接な連絡をとり、10月13日にはハルビンにあった唐昆の家で85グループを結成した。(中略)また姜国思の連絡と史履升の承認を経て、吉林高等師範学校に86グループを形成した。建国大学においても84グループを結成した。姜国思と劉長青は瀋陽に行き、奉天工大の7名でグループを作り、85グループの第二グループを結成しようとした<sup>41)</sup>。

1941年中秋節の前後、中国共産党東北抗日聯軍第9支隊政治委員である郭鉄堅とその部隊の全員が犠牲になった。日本軍は戦場を掃蕩する際、郭の書類がンの中から「北満執委部」の関係文書など発見し、史履升の連絡先など発見した。その後、関東軍により、大規模的な逮捕活動が行われた。それに対して、『記事』は次のように記録している。

「関東軍憲兵司令部はチチハルを中心として昂昂溪、嫩江、白城子、阿爾山憲兵分隊と王爺廟、索倫憲兵分遣隊を集合させ、その他鉄道警備隊149人の特別捜査班を組織して1ヶ月余に渡り尾行捜査や偵察、考えられる限り

---

40) 前掲44頁。

41) 前掲と同じ。

の悪辣な手段を使って全員逮捕の準備をした。(中略) 長春工大、建国大学、吉林高師の三つのグループはまだ保存されていた」<sup>42)</sup>。

『記事』では、その反満抗日活動に参加した主要メンバーの結末を次のように紹介している。『北満執委部』事件の鎮圧する中で、日本憲兵隊は合計 114 名を逮捕した。逮捕された彼等は様々な残酷かつ厳しい刑罰や拷問を受け、さんざん痛みつけられて骨とかわばかりに痩せ衰えていた。1942 年 11 月、王耀钧、史履升、周善恩の 3 名が絞首刑、4 名を無期懲役、12 名を懲役 15 年、14 名を懲役 10 年、2 名を懲役 5 年に、合計 35 名を政府転覆罪で、それぞれ有罪の判決を下した。敵が判決を宣告した後、王耀钧と史履升はその場で悲憤慷慨し、敵を弾劾する演説を行った。1943 年 3 月、王や史ら 3 名は『日本帝国主義打倒!』『中国共産党万歳!』を高らかに呼んで英雄らしく正義のため命を捧げた。(中略) 1942 年 4 月、敵は唐をハルビンの江上軍司令部の軍法会議にかけ、懲役 7 年の判決を下し、ハルビンの監獄に収監したが、1945 年『八一五』に日本が降伏した時出獄した」<sup>43)</sup>。

#### その二：「12・30」事件

中国側の同窓会刊行物によれば、12・30 事件について次のように記述している。『9・18』による東北侵略が開始されてから、日本帝国主義による東北支配の 14 年間、彼等は東北抗日聯軍や義勇軍、愛国志士や広範な人民に対し、掃蕩や討伐、肅清などの三光政策で血なまぐさい大殺戮を行った。中でも大規模な弾圧は 30 余回行われ、『12・30』事件はその中の一つに数えられる」<sup>44)</sup>。

『記事』では、『12・30』事件の経緯に関して、次のように記録している。「新京工業大学の張世誠、牛景和、軍官学校学生崔立福（「恢復会」の副会長）や常吉ら、また瀋陽農大<sup>45)</sup> 学生楊文閣、その他建国大学、法大、医大、奉天工大の学生から専売総局、中央銀行、放送局、瀋陽稅務監督署などの職員

---

42) 前掲 45 頁。

43) 前掲 46 頁。

44) 前掲 46 頁。

45) 当時奉天農業大学である。

まで、組織に吸収してきた。組織の名称を変更する二度の会議の研究で、一度は〔1941年〕9月7日中央銀行宿舍の石明太の家で開かれた会議では『東北大衆革命党』、また一度は、〔1941年〕11月30日、四道街新民旅舎で開かれた会議では『鉄血同盟』と改称、組織機構を建設し、共産主義思想の宣伝や反満抗日の活動を進めることなどが決定された<sup>46)</sup>。日本憲兵はスパイから組織の基本を把握した後、12月30日に、逮捕活動を行った。『記事』はその流れを次のように記録した。「12月30日ハルビン市南崗曲線街41号にあるロシア式の鉄道寮で『東北連絡会議』を召集すると称し、各地に代表を派遣するよう通知した。会議は中共代表が講演を行い、当面と長期に渡る敵との闘争について指示をするというものだった。(中略)会議では中共代表を偽った劉玉廷が開会の挨拶を述べ、各地の代表が活動状況を報告、王福作が記録した。会議が終わろうとした時、前もって潜伏していた一群のスパイ達が突然室内に闖入し、会議の参加者全員を逮捕した。同時に日満の特務機関は東北各地の読書会のメンバーや抗日組織の参加者を恣に搜索、逮捕した。その後1942年初頭までに愛国青年355名が逮捕された。満洲国高等法院は171名に判決を下し、その中、馬成龍、劉榮久ら9名は死刑、無期懲役は8名、有期刑は128名、猶予刑は15名だった。判決が定まらず仮釈放を受けた者はみんな所轄の住所や派出所毎に厳しく拘束され、ことごとく偵察の対象とされ、外出には常時許可を必要とされ、密かに尾行や監視をされた<sup>47)</sup>。

『記事』では、反満抗日運動に参加した青年らについて、次のように語っている。「反満抗日の情熱に溢れる青年達は獄中で各種の残酷な刑罰や非人道的な痛めつけを受け、心身は酷くボロボロにされた。そのため骨と皮だらけに痩せ衰え、息も絶え絶えだった。しかし彼等は凜として節を曲げず、不屈の精神でお互い励ましあいながら獄中闘争を闘い抜いた<sup>48)</sup>。

建国大学の中国人同窓である聶長林は、逮捕された建国大学中国人学生について次のように語っている。「偽満洲全域の大逮捕は、昨年〔1941年〕の

46) 前掲 47-48 頁。

47) 前掲 48 頁。

48) 前掲 49 頁。

12月30日に始まったので、中国学生に対するショックの強さは言語で絶するものがあつた。(中略) その人たち(逮捕された学生ら)は私にとって、いずれも抗日愛国の英雄であつて、偉い人たちだつた。皆が集まると、必ず逮捕された人についての議論が話題の中心となる。(中略) 一言一言に敬愛の感情を込めて、三三五五の集まりで語られた。誰もがこんな勇敢な、反満抗日活動に身を捧げた同胞がいることを、誇りに思つていた」<sup>49)</sup>。

### その三:「読書会」と「給食差別反対闘争」

『記事』によれば、「12・30」事件後、中国人学生は厳密な統制と監視下に置かれ、書籍類はいつも秘密に検査されるなど、「ある種の白色テロの雰囲気」が漂つていた<sup>50)</sup>。「12・30」事件の教訓に学びながら、実効あるやり方を研究し、明確な組織形態を取らず、同じ道へ志のある気心の知れた友人に頼りながら活動を展開した。太平洋戦争の進展に従つて、読書会の活動もようやく活気が生まれてきた。<sup>51)</sup> この時の読書会活動のチャンネルは更に多くなり、ソ連の本や革命歌曲など書籍の種類も増え、また戦況を伝える新聞の切り抜きなどをした。この時の読書会の活動方式について、『記事』の中では次のように記録されている。「書物の伝達の方法は縦線の関係で隠蔽しながら行い、身の安全を保証した。受け渡しする進歩的書籍は必ず表紙のカバーを変え、本の名称も偽名にし、教科書の中に挟んで、講義の最中でも身体から離さずに携帯して日本人の注意を引かぬようにした。読書や本の交換には、人がいないところか郊外で、あるいは学校の外で散歩するときに行った。読書の後はいつも校友達と理解したところを話し合つたり、情勢を論じたり、それぞれ個人の抱負を論じたり、大志を抱く心情を吐露したりしてお互いに励まし合つた」<sup>52)</sup>。

一方、他の活動を通じて、中国人学生らが行つた地下工作も徐々に復活し

---

49) 聶長林『幻の学園・建国大学——中国人学生の証言』、建国大学4期生会誌『楊柳』(別冊)、岩崎広日本語校訂、1997年、66頁。

50) 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997年、50頁。

51) 上と同じ。

52) 前掲51頁。

た。『記事』によれば、「また多数の炭鉱労働者が日本侵略者によって東北や山東省各地から連れてこられ、奴隷と同様に鐵条網のなかに囲い込まれて、完全に人身自由を失っていた。彼等の住まいは茅草の棚の中にあった。また食べるものはカビの生えた『とろの実うどん』と『条和面』だけで空腹のしのぎ、飢えと寒さに迫られ、牛馬と変わらぬ生活を強いられていた…そして炭鉱での実習では、労働者達に接触し、機会があれば地下工作員に接触した。1945年董作山の場合は、撫順炭鉱での実習時、田宇という、ある中共中央東北局から、炭鉱労働者に働きかけるために派遣されたと自称する人と知り合い、その人からガリ版刷りの「持久戦論」、「新民主主義論」など、毛沢東の著作を貰った」<sup>53)</sup>。

続いて、「給食差別反対闘争」も中国人同窓らが常に回想文集で語っている内容である。新京工業大学における「給食差別反対闘争」について次のように記録されている。「[1944年春]日本人学生がまた主食分割を要求していることを、食堂の炊事員から得てきたニュースで知った。この時期はちょうど5期生の卒業実習であるので、分割反対の闘いの責任は6期生にかかってきた。董作山と徐福輝が主体となり対策を研究するため、各科の代表を召集した。その会議では全校友が要求と行動を統一して団結し、強く食事分割に反対することを決定した。これに対し迎専八学監は採鉱学科の井上秀雄と董作山に呼びかけ、『経済戦』のために日本学生の米飯を支持するという理由で、中日学生の食事分割と、食卓を分離することを決定した旨通知し、これを強制的に執行した。そこで炊事員は夜明けから朝食作りを始め、日本人学生は米のお粥を、中国人学生はとうもろこしのお粥を炊いた」<sup>54)</sup>。

この様なことがあって6期の各科代表は毎晩秘密集会を開き、「食事を取らない」ことを統一した要求として闘い、組織者を明らかにしないことを決定した。このことで示された中国人学生の団結の力は、学校側を脅えさせた<sup>55)</sup>。『記事』によれば、その闘争の成果は次のようであった。「引き続き日

53) 前掲 53 頁。

54) 前掲 60-61 頁。

55) 前掲 61 頁。

本人学生が各科毎に各個撃破という小細工を使って、何故主食分割に反対するのかとか、指導者は誰かとか、いちいち細かく質問してきたが、みんなと一致して反対なのだと答えた。この後、董作山は何度が迎専八学監と交渉したが、この関東軍大佐の態度は強硬だった。この頃、日本人学生も白米の配給量が少なく、高粱米の分量の方が多いことに気がつき、別々では日本人学生も腹いっぱい食べられないので主食分割は不賛成だと言い始めた<sup>56)</sup>。結局、給食反対闘争は一度に勝利した。

1945年、9期生が入学後しばらくして、日本人学生は中国人学生が増えたのを理由に、再び主食分割を要求した。それをきっかけとして、新京工業大学で主食分割が始まった。『記事』ではそれを次の様に記録した。「主食分割の第一食目の時、日本人学生のお祈りが終わった後、食事を始めようとしたまさにその時、食堂にいた中国人校友はその場で抗議の演説を始めた。そして満身を怒りで震わせながら質問をした。『中国人はなぜ中国人自身で作った白米を食べることができないか?!』と。日本人学生はこの激しい怒りの言葉を聞き、この怒りに満ちた情景を見て急いで食事を食べ終わり、慌てて外に出て行った。この様子は中国人学生側の正義の力を明らかに示すものだった。主食分割後、日本人学生の白米の配給量は減少し、いつもゴロゴロと空腹を抱えている状態だった。この事実は、一般の日本人民こそ日本の軍国主義による侵略政策を遂行してゆく上での被害者であったことを証明していた<sup>57)</sup>。その中国側の語りを通じて、新京工業大学当局が相対的に慎重的な態度で学生間の対立を解決したことが分かる。一方、『記事』では「日本軍国主義」と「一般の日本人民」を別けて評価することを明らかにしている。中国側同窓は「記憶の再構成」の過程では、それについて鮮明な立場を示していた。つまり、日本軍国主義に反対しているが、日本人同窓に対しては一般民衆として同情的な態度を選択した。

その四：満洲経験を軍国主義教育として考え、否定的な感情を表すこと。

---

56) 前掲 61 頁。

57) 前掲 62 頁。

『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』によれば、中国人同窓生には、在学期間に受けた教育は、常に「軍国主義教育」と再構成された。例えば、学生の制服は統一した規格があった。<sup>58)</sup> さらに、中国人学生は寮歌<sup>59)</sup>を通じて、軍国主義教育を実感した。

それ以外でも『記事』は「勤労奉仕」に関する中国人学生の集合的記憶を反映し、さらにそこでは被害者としてのトラウマ的な記憶も反映された。中国側の同窓生はこれを「日本の侵略者」が各大学の大学生を組織して、軍需生産のための「強制労働」と表現している。『記事』には次のような記録がある。「[1943年]6月14日、工大の学生は新京神社に参拝の後、他校の大学生と共に兎玉公園に集合、『勤労奉仕』大隊を編成、雨の中で閲兵式が行われました。6月19日には東寧に向けて出発しました。綏芬河一帯は原始森林で、その中の昼夜を分かつず雨を冒して行軍、樹木を伐採し、泥土を除けて新しく道路を修築しました。(中略)晴れた日でも太陽を見ることができないほど湿気の高い密林地帯で、ブヨが飛び交い激しく人を刺し、熊や猿があたりを駆けたり吠えたりして、恐怖の気持ちでいっぱいでした。このように大変劣悪な環境と困難な苦難に堪えられず、途中で病死するものもありました。7月20日になって、毎日の労働や行軍の疲労で力が尽き、長い道のりを一ヶ月の長さに往復し、この『勤労奉仕』は終わりました」<sup>60)</sup>。その他、『記事』では1943年、1944年の冬休み、夏休みに、学校側は上級生を組織し、撫順、鞍山、瀋陽〔当時は奉天〕などの地区の鉱工業企業へ「勤労奉仕」と称して、日本軍の軍需品の生産労働や兵舎の建設に強制的に参加させたことを記録していた。

58) 『記事』31頁によれば、高等術院以前は日本の高等専門学校のスタイルに従ってリボンのついた黒い丸帽と黒色の制服であり、「技術院」とか「大学」の徽章のある帽子をかぶり、各科および学年・クラスの区別を表した。1940年に工業大学になってからは、学生の制服は国防色のウールのサージ服となり、角帽とカーキ色のラシャの外套に改められた。冬は防寒帽と防寒靴をつけ、教練のときは戦闘帽とゲートルを巻いた。

59) 前掲31頁、寮歌は次のようになっている：歴史は遠し、燦として；日出づる国に、溢れる；興亜の使命、果たすべく；新に国を、興したる；我等が抱負、誰か知る。

60) 前掲33頁。

『記事』では中国人学生はそのような軍国主義色が濃厚である学府での学習の動機について、愛国的な要因にまとめた<sup>61)</sup>。さらに、個人で苦学する他に、先輩に依頼して、互助学習し、団結して学習の困難を克服した。

愛国感情に従って、「軍国主義」に抗する「反満抗日」運動が発生するのは自然である。「12・30」の大がかりな逮捕以後、警察や特務は常に学校を訪れて、「思想犯」を捜し、政治的迫害による恐怖心を植え付けようとした。また日本の軍国主義教育では、厳しい階級概念を学生の頭に刻印した。「また街頭で上級生に逢えば必ず敬礼をし、上級生はいつでも下級生をなぐって、罵ってもよかった」<sup>62)</sup>。日本人学生はいつも「満系学生」を侮辱し、叱責してもよかった。中国人学生は常に身の安全と民族の尊厳がおびやかされ、精神上の長期にわたる抑圧を防ぐことができないまま、苦悶と悲憤の状況が続き、毎日のように抗日戦争の一日も早い勝利を待ち望んでいた。そして、彼らの集合的意識は「必ずや団結して共に国難に向かい立ち上がるべきである」<sup>63)</sup> というものであった。

## 第二節 中国革命に参加する

中国同窓生の回想文集は政府側の組織により出版された。そこに中国共産党の影響が反映されているのは自然な事実である。従って、彼ら中国人同窓生が在学中に行った「反満抗日運動」および「中国革命に投身」など民族性・革命性が示されている出来事は記憶再構成の重点として強調された。更に、上述の様な立場を明らかにする回想文集は、中華人民共和国が成立して以来の政治環境に適応することであり、中国主流のイデオロギーを示すことを意味する。

『新京工業大学中国校友記事』では、中国同窓が在学中に中国革命運動に参加した過程を記録している。「革命の征途へ向かって」と題しているその部分は、次の様に述べている。「抗日戦争に勝利してから、偉大な解放戦争

---

61) 前掲と同じ。

62) 前掲と同じ。

63) 前掲 36 頁。

を経て、社会主義新中国が成立するまでの4年間は、中国社会は天地の覆るような偉大な変革の時代だった。校友達は正にこの偉大な歴史の転換期に遭って、それぞれの環境こそちがっても、様々な機会を通じて革命教育を受け、認識を発展させ、政治方向を明確にして、国家の命運と個人の前途について中国共産党に希望を託し、前後して革命への征途へ踏み出して行った」<sup>64)</sup>。

回想文集によれば、一部の中国人同窓は共産党の地下組織と早くから連絡をとり、革命運動に参加した。『記事』では、新京工業大学の中国人学生は1944年ごろから、中共中央の新京における地下組織<sup>65)</sup>に参加した。その時、中国人学生の主な仕事は、満洲国の軍事や交通等の情報を収集することであった。更に新京の軍政機関の地図等を作成する仕事もあった<sup>66)</sup>。1944年に卒業したある中国人同窓は、卒業後、同年の冬に満洲鉍山株式会社設計室で仕事をしていましたが、新京の中共中央地下組織の責任者と連絡した。1945年8月15日の前夜、共産党地下組織の責任者の意を受けて、共産党の指導する東北工人連盟の総務課長になり、労働運動を組織したり、工場設備を防衛したり、合わせて東北地方の金属鉍山を防衛する計画や、地質の完全な資料を整備して、東北有色金属管理局に渡った。そして、中国共産党は1945年にすでに東北地方の金属鉍山の関連資料を把握していた<sup>67)</sup>。

中国側の回想録によれば、終戦前後に後で中国革命に参加した中国人学生は多かった。ある新京工業大学の中国人学生は、1945年、北平の地下党組織の紹介で、太行根拠地に行き、革命に参加、抗日大学第六分校で1年余り勉強し、のちに晋冀鲁豫辺区の工業庁で仕事に就いた<sup>68)</sup>。ある学生は、1946年7月、東北民主聯軍に従軍していたが、新京を撤退して間もなく、中共中央東北局社会部の人員を通して、共産党員の指導のもとで、国民党の政治、

64) 前掲 62 頁。

65) 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』によれば、「東北救亡総会」など地下組織があった。

66) 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997年、62-63頁。

67) 新京工業大学同窓生張富民の個人経歴。前掲 63 頁。

68) 新京工業大学同窓生韓永純の個人経歴。前掲 63 頁。

軍事の情報を収集する仕事を行った<sup>69)</sup>。

さらに、新京工業大学では 1946 年当初、最初の中国人同窓会である「校友会」が設立された。その他、革命活動に参加した同窓、および卒業前の同窓らのために長春工大補習学校を成立させた<sup>70)</sup>。『記事』では、その互助活動に関して次の様に述べている。「日本敗戦後、卒業できなかった校友達は(中略)正式の大学開校を待っていることができず、いち早く補習課程を組織することを要求し、学業を荒廃から立て直そうとするものだった。この考え方は丁明新、趙恩棠ら大先輩の力強い支持を得て、丁明新の指導の下に、趙同、姜申たちは具体的な準備作業にとりかかった。工大校舎はその頃、ソ連軍に占領されていたので、差し当たり建物の問題の解決をすることが必要だった。当時、建国大学 1 期生の佟鈞凱(趙洪<sup>71)</sup>)は『12・30』事件で逮捕され、『八・一五』後に出獄してから、吉林大学にあった元日本の建築会社『竹中工務店』の跡に、『東北青年会』を設立していた。そこに未使用の空室があるのを知って、汪匯海と王文萃(王韜)は佟鈞凱と借室の相談をしたら、佟はあっさり応じてくれた。建物の問題が解決した後、大事なことは講師をお願いすることだったが、資金としては無一文で、講義が義務ということでは、唯々大先輩達の援助を求めるしか無かった。尊敬する先輩達は気高い愛国熱情と後輩達の切々たる希望に応えるため、一種の使命感と責任感を持って自ら進んで授業を受け持ち、そのうち自分に余分なお金はないのに気前よくお金も出して、校友達の生活困難の解決に力を貸したりした。その頃の工大生の中で授業を受け持った校友は、丁明新(物理)、高旭征、賈乃廷(数学)、高向適、趙恩棠(力学)、孫吉山(化学)等で、外から招いた講師としては王世庸(英文)、王琳(現代物理)の他、ロシア語の講師もいた<sup>72)</sup>。

1946 年国民党政府は長春において長春大学など大学を建設することを計

---

69) 新京工業大学同窓生高非の個別経歴。前掲 63 頁。

70) 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997 年、64-67 頁。

71) 建国大学 1 期生。在学中すでに中国革命に参加した。建国大学系回想文集に回想録が収録されている。

72) 前掲 66 頁。

画した。一方、中国共産党は、終戦直後、長春における国民党により建設した大学を中心として革命活動を行なった。その時、元建国大学および元新京工業大学など大学の同窓生は、革命の主力になった。国民政府により建設された長春大学などでは、教師には留用された日本人教授が多くて、学生は満洲国時代の各大学の在学生在が主体で、1946年12月27日に正式開校し、1947年7月5日第一回の卒業生を出した<sup>73)</sup>。詳しい内容は『記事』で、次の様に記録されている。「(前略) 化学工学系を例にとれば長春、ハルビンおよび奉天工大の応用化学科学生と吉林師道大学の化学系学生だった。学制は4年制で、長春工大の6期生は4年級に、7期生は3年級に、8期生は2年級に、9期生は1年級に編入された。他の大学も同じ様なやり方で、期毎に各学年に編入した。工大の校友で長春大学に進学し、学習を終えた者は約100名余りいた」<sup>74)</sup>。

その過程について、『記事』では次の様に記録されている。「中共中央東北局都市工作部は、許慎、孫亞明、趙洪（佟鈞凱）、呂天を前後して派遣して長春工業大学の学生運動の非合法活動を指導した。その時、軍統少将である長春大学訓導長張煥竜と国民当局の特務は学生運動を破壊するつもりだった。その時、学生と彼らは、激しい闘争を展開した。その時、孫亞明は張の中学時代の先生であった関係を利用して、1947年7月、法学院経済学部教授を兼任しながら、1948年2月には長春大学総務部長に就任。その合法的な地位を利用して、敵との闘争を有利に指導した」<sup>75)</sup>。ここで注意すべきことは、孫亞明等の国民党に要職に任じていた人、または国民党当局の信任を得た専門家らは、二重の身分を持っていたことである。彼らのもう一つの身分は中国共産党の地下黨員であった。彼らは表では勤務を続けながら、実際には中国革命を指導していたのである。『記事』によれば、彼らの様な共産党地下黨員の支持を得て、長春大学の学生は以下の様な運動を行なった。

その一：「資格審査」反対運動。

73) 前掲 69 頁。

74) 前掲と同じ。

75) 前掲と同じ。

「1946年春のこと、一部の〔元新京〕工〔業〕大〔学〕の校友は瀋陽東北臨時大学で行われていることを聞いて、瀋陽大学、中学生らの『五・四』運動記念青年デーに参加、国民党の腐敗に反対するデモにも参加した。〔中略〕長春大学が設立されたというニュースを知ってから東北大学学生連盟は工大の校友が参加する先遣隊を長春へ行かせた。孫亜明の支持の下で、工大校舎を基地とし、校友たちを結集、食事や宿舎の世話をし、自発的に立て直す準備活動を始めた。1946年9月18日、長春大学の学生は中共の非合法活動の指揮のもとで、『資格審査』の闘いに対する国民党教育機関接収高官に反対して、『資格審査反対』のスローガンを貼ったり、壁新聞を書いたりして、闘いを盛りあげた。(中略)張煥竜は(中略)新一軍に連絡をとって学生を鎮圧しようとした。(中略)学連の隊列は負傷者や死者が出て人員が減り(中略)、翌日、長春大学学生連盟は全校学生大会を召集、学校側に対して嚴重抗議するとともに、一般の人々にもビラを撒き、学校側が学生の合理的要求を無視し、軍隊と結託して学生に暴行を加えたことを暴露した。(中略)〔結局、〕学校側は学生の要求を受け入れ、反『審査』闘争は勝利を得ることができた」<sup>76)</sup>。

その二：「学連組」にたいする闘争。

「1948年1月初め、国民党は長春大学への弾圧が強めるため、長春大学内の国民党や三民主義青年団、軍統（軍事委員会中執委調査統計局）、中統（国民党中央執行委員会調査統計局）<sup>77)</sup>、政治工作隊などのリーダーを寄せ集め、「学連組」という一つの学生組織をデッチ上げた。(中略)「学連組」の主な任務は、進歩的学生の活動を偵察し、学生運動を鎮圧することであった。その偵察の内容は8項目があった<sup>78)</sup>。校友会の劉廣武、劉之中らは、1948年4月18日の夜9時頃、国民党特務が教授を殴打暴行した大字報を張り出した。

---

76) 前掲 69-70 頁。

77) いずれも国民党政府の特務組織である。

78) 『記事』の第71頁による：「学生の中における中共非合法メンバーの活動、国民党を欺く行為、マルクス・レーニン主義の書物の発見、大字報やスローガンの撮影、無線局の探知、解放区の宣伝、私蔵の武器、学園スト、授業サボタージュの組織、デモ行進などの偵察だった。」

二人は夜中に監視に当たっていたスパイに発見され、逮捕された。(中略) 劉賡武は身体が弱かったため、1948年6月30日の午前7時、拷問の末、遂に犠牲となった。劉之中の足は刑罰のために一生治らない障害が残った。解放後、劉賡武は中国共産党長春市人民政府から「革命烈士」に列せられた<sup>79)</sup>。

その三：長春包圍段階での情報活動および解放区へ転移。

「1948年6月末、長春包圍は最後の段階に入り、食糧を絶たれた国民党軍は市内で縮こまっていた。国民党教育部は数台の飛行機で長春大学の教授や学生を南京へ転校させる決定をした。共産党は国民党の転校計画を粉砕することを決定し、広範な教師、学生に当局の陰謀を暴露し、転校反対の闘争を進めた。同時に、孫亜明は総務長と『転校委員会主任委員』という名義で、膨大な転校予算を計上させ、教育部に無理矢理に認めさせた。(中略) 当時、一部校友は、地下工作グループに参加し、各大学における敵<sup>マツ</sup>や、警備司令部の情報収集の責任をもち、味方の包圍部隊に情報を提供していた<sup>80)</sup>。また同時に、転校反対の闘争にも加えて、秘密宣伝を展開、少なからぬ同窓生を長春に留め、解放区へ逃げ出させた」<sup>81)</sup>。

その他、一部の新京工業大学の中国人学生は、共産党が経営した長春学院に参加した。彼らは、中国共産党の影響を受け、国民党に対する工作に参加した<sup>82)</sup>。ある人は、人民解放軍に入隊して、国民党軍隊と戦った<sup>83)</sup>。上述の様に、新京工業大学の中国人学生は、戦後共産党との密接な連絡があったのは事実である。彼らは共産党に入り、中共当局の政治的立場を選択した。『記事』の記録によれば、長春学院の中心任務は以下の様であった。「(前略) マルクス主義と毛沢東思想、および共産党の方針や政策を学習することを通

79) 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997年、71-72頁。

80) 『記事』74頁によれば、国民党は長春を固守するため、都市防衛委員会を組織して、トーチカまで作らせようと、長春大学の教授をその委員に任命した。教授の紹介で、一部の新京工業大学の同窓生らは工事監督員として補充された。トーチカの補修が終わるのをまって、ある同窓が都市防衛工事の設計図の中からトーチカの位置図を隠れ持ち出し、組織を通して九台県の共産党長春工作委員会に送り届けた。

81) 『旧「満洲」国立新京工業大学中国学生の記録』、1997年、72-73頁。

82) 前掲 74-76頁。

83) 前掲 76-78頁。

して、革命運動に参加した知識分子の中から幹部を養成し、長春を解放するための組織を準備することだった<sup>84)</sup>。

当時の主要な学習内容は時事政策で、毛沢東思想を学び、土地政策、商工業政策、知識分子政策などについて研究した。具体的には、次の様であった。「自分たちが手足を動かして校舎の修繕をしたり、工具を製造したり、食事を作ったり、野菜を作ったりして学習と生活を保証した。生活は苦しかったけど、学習精神は旺盛で、早朝はジョギング<sup>85)</sup>や体操、放課後はバレーボールや歌、ヤンコー踊り、バスケットボールなどして大変活発だった。学生が演出した『群猴』、『王家大院』、『血涙仇』などの演劇は九台の人々の好評を得て、革命闘争を励ますまたことない教育宣伝の材料になった<sup>85)</sup>。

### 第三節 新中国建設への貢献

解放初期においては、新京工業大学の中国人同窓は広範な職員や労働者とともに工場の回復を成し遂げ、鉞山の建設と生産を発展させる任務を果たした。中国共産党政府の第一次五ヶ年計画（1953-1957年）が始まって、中国人同窓は少なからず、156項目の重点軍需産業を含む重点産業の大型、中型の新しい建設や、規模を拡張する建設に進んで参加し、大いに力を発揮して、貢献した。『新京工業大学中国校友記事』では次の様に、中国人同窓生による貢献を述べている。「例えば、新中国の国産第一号の戦車の内燃機関、第一号の飛行機のタイヤ、第一号の蒸気機関車やディーゼル機関車、第一号の自ら設計施工した鉞坑、第一号の放送専用のテープレコーダーやビデオ撮影機、第一号のアルミニウム工場、第一号の自動高射砲生産工場、第一号の魚雷工場、第一号の光学機器の工場などの建設から、ある何名かの同志の高度の科学技術の領域等まで、これらは皆校友達の心血の結晶とすることができた<sup>86)</sup>。

また中国における大型の企業の増設や新設、全国の鉄道網、東北の電力網、

---

84) 前掲 75 頁。

85) 前掲 76 頁。

86) 前掲 80 頁。

道路網と水利工事、北京および東北の各大都市、中都市の建設、科学研究や設計の事務所から国務院に関係のある各省や委員会、あらゆる会社企業の技術行政工作など、中国人同窓生の業績と奉獻は至る所に残されていた。『記事』によれば、新京工業大学の中国人同窓は、中華人民共和国が成立した後、以下の様な分野で活躍していた。

その一：抗米援朝（朝鮮戦争）と外国支援活動

『記事』では、抗米援朝と外国支援活動に対して次の様に記録している。「中国共産党の第二次戦役〔朝鮮戦争〕が始まってから、中国人民志願軍に参加した新京工業大学の中国人同窓生は、後方勤務の道路建設総隊にあって、制空権の失われた状況下でも、志願軍の武器輸送線を確保し、言葉に尽くせない困難な闘いを進めた」<sup>87)</sup>。

外国支援の活動面では、5名の中国人同窓生がベトナム支援に参加したことや、2名の同窓生がタンザニアの鉄道建設の援助に参加したことが知られている<sup>88)</sup>。『記事』には、詳しい内容が記録されている。「〔新京工業大学の中国人同窓〕（前略）ベトナム民主共和国政府から公式に発行された賞状と記念メダルを受けた」<sup>89)</sup>。ある同窓は1965年から1968年までベトナムの道路建設の支援に赴き、ベトナム援助事業指揮部の指導的地位にあった第303橋梁隊の隊長に任ぜられた<sup>90)</sup>。さらに、アフリカで援助活動を行なった新京工業大学中国人同窓もいた。『記事』には彼らの活動を簡単に記録している。「〔新京工業大学中国人同窓は〕（前略）第三鉄道工事局の業務に従事していた期間、タンザニア鉄道第一機械建築隊の技師長となり、2年以上の活動を続けた。〔もう一人は〕工務専門家としてタンザニア鉄道で2年間の建設の援助をした」<sup>91)</sup>。

---

87) 前掲 82-83 頁。

88) 前掲 89 頁。

89) 前掲と同じ。

90) 前掲 89-90 頁。

91) 前掲 90 頁。

## その二：軍需工業分野での活動

新京工業大学の中国人同窓は、抗日戦争勝利ののち、鉱山や企業の防衛に立ち上がり、生産の回復に努めながら、中国共産党の内戦を支援した。中華人民共和国建国後の第一次五ヶ年計画が始まるや、直ちに老廃した鉱山の改造に取り掛かり、あるいは新しい鉱山の建設に入って、石炭鉱業の発展計画や、設計の实地調査、施工の管理、技術革新や生産、建設の任務などの方面で重要な貢献をした<sup>92)</sup>。冶金系統の同窓生らは、建国後、鋼鉄業界で活躍していた。彼らは冶金省、中国有色金属工業総公司等国営鋼鉄会社、全国各地の製鉄工場、および冶金建築科学研究院など機関・局などで正副技師長、主任技師、院長、支配人などの職務に就いた。同窓生らは冶金に関する地下資源の調査や設計を行い、鉱山や工場の建設、科学技術の進歩などの面で活躍した<sup>93)</sup>。さらに、中国同窓は、中華人民共和国の電力、郵便、電話、テレビ放送、機械、化学工業、石油化学、軽工業など分野で様々な奉獻をやってきた<sup>94)</sup>。

軍需工業および政府部門で勤務した中国同窓生韓維範<sup>95)</sup>は、建国以降、中華人民共和国に大きな奉獻をした。『記事』は次の様に記録している。「韓維範は兵器工業省北方工業公司高級技師であった。第二機械部第一局に在任中、第 127 工場内の熱処理職場の深基礎の施工に際し、初めてウェルポイント工法による地下水位の引き下げ技術を採用し、キーポイントとなる技術問題を解決した。省や局の奨励を受け 1956 年に国防工業関係の全国先進生産者代表大会に出席、毛沢東主席の接見を受けた。156 項目の国防産業の工事の中でいくつかの、整理されていない資料や設計、工場敷地の選択、施行から竣工までの検査、交付から使用までの全過程にわたる組織仕事を進行させた。後に第三機械省第五局の基本建設処副処長、第五機械部計画司長期計

---

92) 前掲 90-95 頁。

93) 前掲 95-99 頁。

94) 前掲 99-141 頁。

95) 本論文の筆者(韓美怡)の祖父の長兄にあたる。新京工業大学卒業、中国兵器工業部北方工業公司高級技師であった。

画処処長として勤務、兵器工業の長期計画から「三線建設」計画至るまで責任を負い、また四川、貴州の山の地方を奔走し、工場敷地の選択や計画的な建設の仕事を進めた。この後第五機械省外事務局（後に北方工業公司与改称）に転出、大連から海南島に至る8ヶ所の海沿いの川口や海岸に分公司の建設の責任を持ってやり、40万平方メートル余りの基幹建設工事を完成した。彼は長期の国防工業の建設の中で、度々の省、局、公司の先進工作者の評定を受けている」<sup>96)</sup>。

『新京工業大学中国校友記事』によれば、中華人民共和国の建国後、彼らは大きな社会上の成功を勝ち取った。要約すると、高級技術職と称される同窓は212名であり、そのうち教授クラスの高級技師は75名、高級技師は102名、教授13名、助教授12名、研究員4名、副研究員1名、高級経済師3名、編集責任者2名、さらに各級学会の理事に選ばれた者80名がいた。また全国的な学会理事は30名で、そのうち副理事長、副秘書長、常務理事8名が任命され、その中で専門委員会に所属する正副主任委員は6名であった。省市クラスの学会理事は50名で、そのうち正副理事長、主任委員、会長などに就任した人は34名いた。また国家科学委員会の専門委員として2名が招聘されている<sup>97)</sup>。中国人同窓らは各級の人民代表大会委員に26名が選出されたことがあるが、そのうち全国人大代表3名、省市の人大代表23名、この中では省市人大常任委員の正副主任3名、常任委員2名、人大都市建設委員会委員、及び副主任として3名が就任した。省市の政治協商会議委員に選出された者は22名、その中で政協副主席に主任した人は4名、常任委員長は7名であった<sup>98)</sup>。

---

96) 前掲 142-143 頁。

97) 前掲 81 頁。

98) 前掲 81-82 頁。

## 第四章 他の出自の同窓生の語りと記憶

### 第一節 台湾同窓生の語りと記憶

李水清は台湾出身の建国大学第 1 期生であった。彼は自らにより『東北八年回顧録』と題した回想録を執筆した。建国大学の日本人同窓生はその回想録を翻訳し、建国大学同窓会が出版した。そこで李水清は「在満期間に受けた特に深い印象と経験」について、在満の第一年より、逐年回顧していた。李は、当時の満洲における出来事について、次の様に語っている。

#### その一：民族問題について

李水清は日本の植民地である台湾出身の学生であるが、自らは漢民族としての意識が高いと自己認識していた。李の回想録によれば、彼は建国大学入学以降、満洲国における様々な機関で台湾出自の学者および先輩と会って話すことがあった。彼によれば、その時の在満台湾人は一般的に次のように自分の境遇を考えている。「日本植民地の台湾島内の台湾同胞は、能力の大小に関わらず、皆抑圧されて頭を上げられない。しかし、若し海外に出て、一つ一つ潜在している力を発揮できる場所を得れば、頭角を現すことができる。しかも皆団結し、相互に助け合える」<sup>99)</sup>。しかし、彼は日本国籍を持つ民族であると自己認識していた。「皆日本国籍であるが、漢民族としての意識は非常に高いと自認している」<sup>100)</sup>。

建国大学または満洲領内における民族協和について、李は次のように自分の観点を述べている。「当時の満洲では、漢民族の問題は同時に日本民族の問題であるとして、各民族は互いの立場から相手方を理解し、相手方の身になって考える。たとい常時激烈な討論を交わしても、互いに尊重敬愛の念を忘れず、実際この様にして国家社会の大問題を、20 歳に満たぬ青年達がどの様にして答えを出したか。各民族の同級生は皆我々自身の肩に時代の重荷を既に背負っていることを共通の認識していた。(中略)我々は実地調査に満洲の村落を訪ね、漢民族の堅忍不拔の精神と旺盛な生命力を体感した。

---

99) 李水清『東北八年回顧録』、訳者 高沢謙三、建国大学同窓会、2007 年、18 頁。

100) 前掲と同じ。

(中略) 我々に民族奮闘の啓示を与えてくれた」<sup>101)</sup>。しかし、李は、建国大学および満洲国における民族問題の鍵は、日本人の態度であると次のように語っている。「問題の鍵は民族協和が本物か偽物かであり、特に日本人が依然として統治者の姿勢を以って他の民族に相対しているか、或は当地が日本植民地であるとして、一切日本の国益を優先しているかである。若しこの様であれば、建国の理念とは甚だしくかけ離れている。建国大学入学以来既に二年数ヶ月を経て<sup>102)</sup>、校内では切実に民族協和と新国家建設を實踐したいと願ひ、誠意は確實にあるが、建国大学以外の一般社会ではこの様に行かない。しかも七七事変後戦争が更に拡大し、中日両民族の祖国が生死の戦いをしている最中に、どうして心平らかに民族協和を實踐できようか」<sup>103)</sup>。

#### その二：戦争についての語りと記憶

台北帝国大学の中井淳教授は、1939年夏に建国大学を訪れ、全校学生<sup>104)</sup>と各塾で座談会を開き、日本農民、台湾農民および満洲農民の実情について討論した。李水清は1939年冬休みを利用して台湾に帰った時、途中広州で暫く滞在し、中井教授と広州市内各地を参観した。李はその時の広州地区について、中井教授と意見を交換した。李によれば、「戦乱に臨んで最も不運なのは知識分子で、書物を読めず、仕事はできず、仕方なく街の路上で古書や書画を商うほかなくなってしまう」<sup>105)</sup>。中井教授は彼に広州参観後の感想を聞いたが、李は、なぜ広州では南京政府の青天白日旗と異なる五色旗をあげるのかと訪ねた。中井教授の答えは李に最も深い印象を与えた。彼の回想によれば、その時中井教授は日本国内の情勢に絡めて次の様に述べた。「全国民の意思ではない戦争を始めても、到る所で意見が統一できず、例えば興亜院の意見が軍に必ずしも受け入れられず、軍方の意見も陸軍、海軍両方が一致するとは限らない。こちらが提議してもあちらが否定するといった具合

101) 前掲 21-22 頁。

102) 1939 年頃の感想。その時李は二年生である。

103) 李水清『東北八年回顧録』、訳者 高沢謙三、建国大学同窓会、2007 年、27 頁。

104) 当時 1 期生、2 期生のみで、二、三百人しかいなかった。

105) 李水清『東北八年回顧録』、訳者 高沢謙三、建国大学同窓会、2007 年、23 頁。

で、始終共通の意識が持たず」<sup>106)</sup>。

李水清は、その経験を得た 50 余年後、自分の回想録で次の様に戦争について語っている。「1931 年九一八事件発生の際は、日本の中央と関東軍の間では意見の相違があったけれども、軍部としてはまあ意向が一致しており、それに国民の相当多数の支持を得ていた。七七事変発生の際は、一般民衆は戦争目的が何であるかも知らず、軍の内部でも意見は一致していなかった。例えば、時の参謀本部作戦部長であった石原莞爾は部隊増派に反対し、極力戦線の拡大を防止しようとした。このため彼は参謀本部から関東軍参謀長東條英機の下で参謀副長に転任させられた。その後対中国の用兵はすべて出師無名の不義の戦いとなり、戦えば戦うほど深みに嵌り、その間幾度となく挽回しようとしたが、遂に和平の願望を達成することができなかった」<sup>107)</sup>。

その三：上長に対する語りと記憶。

李水清は 1940 年冬休みの時に辻政信の家を訪問し、辻と直接的な交流があった。彼は、辻政信を建国大学の創立者として認め、大いに尊敬した。回想録で、李は辻政信について次のように語っていた。「彼は自分の戦場の経験談を語り、人間形成の原則等について語った。(中略) 私が [辻政信の宅である] 日本式家屋の玄関で別れを告げた時、彼は私が雨着を先に着るようにとしきりに勧められた。私は彼には済ませねばならぬ用事があることを知っており、彼の時間を無駄に取らせてはならないと思い、言われるままに雨着をきちんと着て、玄関を踏み出し、玄関をきちんと閉めた。私は乗ってきた自転車の鍵を開けようとしたが、付近から明かりが見えず、数分模索していた。突然門が開いて先生が様子を見に出てきた。私は別れを告げ門も閉めたのであるから、先生は用事に戻られたことと想っていた。図らずも彼はまだずっと玄関に立って私が離れて行くのを待っていたのである」<sup>108)</sup>。

その様子を見て、李は次のように辻政信の性格について判断した。「先生

---

106) 前掲と同じ。

107) 前掲 24 頁。

108) 前掲 29 頁。

が非常に勇猛な軍人であると人々は皆信じているが、この様に心配りの行き届いた一面を持っていることを知らない。勇猛と細心は表裏一体の者で、勇敢な人ほど細心であり、細心な人ほど危険に臨んで乱れぬ勇気を必ず備えているものであるかもしれない<sup>109)</sup>。

李らに講義した岩間徳也教授<sup>110)</sup>は、「夜間我々に『老子』を講読しに来て下さるが、この先生はまず『小学』(文字学)を講義し、後に続けて『老子』を講義された。当時老教授は既に70数歳になる高齢で、又厳冬の季節では気温が零下二十数度になるが、老教授は苦勞も辞せず、遠路はるばる来校され授業して下さった」<sup>111)</sup>。李によれば、その時、彼ら若い青年たちは、岩間教授の教える中国伝統文化を深く理解することができた。彼は次のように述べている。「当時『師』と『弟子』の求学の気風が非常に旺盛であった」<sup>112)</sup>。

台湾人同窓生である李水清の回想録は建国大学の戦後日本同窓会の協力を得て出版されたが、「刊行のことは」では、その回想録の由来に対して説明している。「二〇〇六年に至り東大名譽教授小島晋治先生から建国大学同窓田山実君に、台湾人が満洲で活動した足跡を調査しているグループがあることを知らされた。小生〔村上和夫〕の同期李水清君にあたったところ、台湾中央研究院近代史研究所口述歴史組が活動しており、研究プランを作成し、1994年5月李水清君宅にも訪問して数時間に亘り討論しつつ録音した。その結果を彼に送ってきたが、その意図する点が李君の話した事実とちがひ、且つ満洲国を理解することが困難であるかに見えた。そこで李君は李家の私家本を執筆し子孫に残すことにした。これが『東北八年回顧録』である」<sup>113)</sup>。上述のように、李の回想録の刊行経緯は、彼の満洲記憶の再構成の流れを示

109) 前掲と同じ。

110) 東亜同文書院卒、金州南金書院院長、金州市民会・王道所員維持会各顧問、南金農園主。金州聖人と讃えられた。外務省奉職後、1904年渡満し、南金書院民立小学校を創立。1943年7月建国大学辞任。

111) 李水清『東北八年回顧録』、訳者 高沢謙三、建国大学同窓会、2007年、11頁。

112) 前掲と同じ。

113) 村上和夫、建国大学1期、「刊行のことは」、東北八年回顧録』、訳者 高沢謙三、建国大学同窓会、2007年、3頁。

している。日本人教授の調査グループが満洲記憶を研究するために口述史研究を行っていたことが一つの記憶の場として認められる。李水清自らの回想録も無論個人に属する記憶の場である。しかしながら、なぜ「事実と違う」という判断が建国大学戦後日本同窓会の幹部により、十余年後の時点で出されたのか。さらに、出来事を経験した人の回想録と歴史研究者が行うオーラルヒストリーの記述両方がある場合、どちらか誠実に出来事を反映するのだろうか。または、どちらも記憶の再構成する過程の一環として認められるのだろうか。こうした問題は今後の研究課題としたい。

## 第二節 韓国同窓生の語りと記憶

建国大学に入学した朝鮮人学生は約 91 人で、全体の学生数の約 7% を占めた。朝鮮人の学生が建国大学を志望する最大の理由は、授業料が無料で、塾の生活をするため、生活費がほとんどかからないという点、また卒業と同時に満洲国の高級官僚に保証される特典が付与されたからであった。建国大学の学科教育は大きく精神訓練と各種の訓練、語学教育、一般科目教育の三つの部分に分かれていた。朝鮮人学生は、精神訓練と様々な訓練教育、そして語学教育について高い満足度を示したが、他方一般的な科目の教育は配当時間が少なく専門的な教育を受けられなかったという意見が多かった。終戦後、韓国軍創設に貢献した学生ほど建国大学の軍事訓練、武道訓練、精神訓練と塾生活を高く評価した。

戦後の韓国では、建国大学の同窓会が成立した。建国大学の在韓同窓会が出版した回想文集では、朝鮮人<sup>114)</sup> 学生の満洲記憶について、以下のような幾つかの語りが記録されている。

### その一：満洲大陸に対する印象

建国大学の韓国同窓会の刊行文集・同窓回想録には、彼らが戦時期に母国を離れて満洲大陸で学生生活を送ることに対する憧れ、および異国での暮ら

---

114) その際、朝鮮半島は全て日本の植民地であった。本論で在学中の韓国同窓を「朝鮮人学生」と記すのは、何らかの政治的意図に発するものではなく、ただ彼らが朝鮮民族であるという事実に着目するからである。

しぶりと故郷への郷愁などが主要な内容として述べられている。

朝鮮人学生一期生安光鎬<sup>115)</sup>は、満洲建国大学に入学した時の自分の考えについて次のように述べている。「自分の方向や座標すら探せない青年学徒の胸には、それは朦朧とした夢というか、いわゆる青雲の志を呼び起こされて、いつの間にか大陸の畑に稲を植えるような刺激だったというべきだろう」<sup>116)</sup>。彼の「民族協和」に対する態度は、上述した台湾人学生李水清とやや異なっている。安によれば、「支給された制服はそれなりに素晴らしく見えたが、防寒帽をかぶり、防寒靴を履くと、それは当時、満洲の各地に横行していた馬占山や張学良の一党、馬賊の若い頭目を彷彿させるような姿で、恥ずかしさを感じた。(中略) 五族協和の実践道場だという塾生活を中心とした建大の中の一人になり始めていた。(中略) なすべき事が何であり、行くべき道がどこであるのかを、こんなふうに反問しながら生きていかなければいけない大学生生活は想像以上の世界だった」<sup>117)</sup>。

彼は、初年度にハルビン方面へ旅行し、外界と初めて接した時に衝撃を受け、その時まで認識していた世界では別の人間社会が存在しているという事実を理解し始めた。彼はその時の衝撃と感動を次のように記録している。「松花江を両輪船に乗って下りながら巡訪した沿岸の漢民族の部落が、原始社会に近い環境であることを見て、人間の根本にある生命力を感じた。多年ロシアが占有していた東支鉄道沿線の白系ロシア人の姿からは、亡国の哀愁を皮膚に痛いほど感じた。(中略) 地理、歴史、民俗学の本を耽読し始めたのもその時期で、複数の民族が共存している三千里の荒野のど真ん中に放牧された野生の馬のような自分を発見して、自分は何ものかと探究し始めたのもその頃だ」<sup>118)</sup>。学校生活に関する回想もあった。例えば、共食に関する回想は以下のようなものであった。「食堂に入ってみると、日系・朝鮮系の前

115) 安光鎬(一期)、建国大学に在学中、「龜村徹也」と改名され、戦後陸軍准将となり、その後チュニジア大使などを歴任した。

116) 安光鎬・「満洲建国大学」、建国大学在韓同窓会編、『歎喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、2頁。

117) 前掲と同じ。

118) 前掲と同じ。

には白いご飯が、大陸系の前にはコウリヤンのお粥が置いてある」<sup>119)</sup>。

## その二：民族協和と民族的軋轢の中で

朝鮮人学生は「日系」の名の下に募集されたが、実際の学校生活では常に「鮮系」と呼ばれていた。日中学生の民族的軋轢の中に巻き込まれた彼らは、差別と遭遇し、民族意識が芽生えたのである。

太仁善<sup>120)</sup>は、戦後日本の建国大学四期生会に参加し、会誌『楊柳』に寄稿したこともあった。彼は、建国大学で感じた民族的軋轢を次のように記している。「日本人〔注：通称内地人〕とか中国人〔注：通称シナ人〕ときけば、本能的に好奇心と警戒心、あるいは敵愾心しか持っていなかった植民地・朝鮮出身の青年にとって、建大で彼らと共同で生活したということは、とても衝撃的な経験だったのである」<sup>121)</sup>。

朝鮮人学生は、民族協和などの問題では、日本人より協和精神に熱心だったと考えられる。金載珍の回想によれば、朝鮮人学生は共食制度に対する真剣な態度を持っていた。彼は次のように回想している。「日本の学生に召集令状が出て、自分たちだけが白いご飯を食べるんだと騒ぎだした時に金相圭君が前に出て、これが協和の精神かと抗議した時の勇気、私はそれを永遠に忘れない」<sup>122)</sup>。一方、金相圭は建国大学の最終局面について以下のように回想している。彼は参議府のL<sup>123)</sup>参議が談話した時、L参議に米ソと戦っている日本の将来に関して露骨な質問を出した。金は7月には学校から脱走する計画であった。「7月の初め、戦闘帽に脚絆姿で学校からそして満洲から逃げた。金泉市内から遠い田舎の家に引っ越したところに、学校から続けて

---

119) 金相圭（新三期）・「2年半の回想」、建国大学在韓同窓会編、『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、58頁。

120) 太仁善（四期）、在学中「大永善雄」と改名し、戦後は株式会社汎洋社の副社長を務めた。

121) 太仁善・「建国大学と私」建国大学在韓同窓会編、『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、54頁。

122) 金載珍・「追憶の建大」、建国大学在韓同窓会編、『歓喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、61頁。

123) 前掲と同じ、名前は詳細不明。

3 回も電報がきた。〈即刻、学校に戻れ。戻らないと除籍処分にする〉というものだった」<sup>124)</sup>。

しかし安光鎬は、建大における反抗運動に対しては、上述された金泳祿と異なる態度を取っている。彼は、周りの中国人学生が反満抗日運動を行なったことに対して、以下のように簡単に述べている。「漢民族の同学であった崔万賢と李樹森、この二人の学生が重慶に逃亡したという事件がある。何だか裏切られ侮辱を受けたようで、憤慨する気持ちと同時に、痛いところを刺されて慌てるようなそんな衝撃だった」<sup>125)</sup>。金は、自分の友人関係について、民族意識に従って選択するのではなく、自らの価値観により決めるべきだと考えていた。彼は次のように回想録に記録している。「いわゆる『馬小屋事件』というのがおこり、藤田松二塾頭の影響を受けた学生たちが、塾を離れて農場で合宿し、既成観念に反抗するように新感覚の先覚者を自負する運動があったのもこの時期だ。彼らも自分と時代との、無数の矛盾を克服しようとしたのだが、私の農場への逃避はかれらの理念とは遠かった。なぜならば、私自身は自由や自然主義に憧れる、いわゆる建大生らしくないリベラリストに属していたからだ。私は交友関係も自由奔放だった」<sup>126)</sup>。

その三：朝鮮人教授崔南善に対する思い出

韓国同窓会の回想文集を見ると、大部分の朝鮮人学生は朝鮮独立運動に関心があった。回想録では、さらに建国大学の朝鮮人教授崔南善<sup>127)</sup>に関する語が多い。閔機植<sup>128)</sup>は以下のように述べている。「崔南善先生の『不成文化論』、『兒時朝鮮』、『檀君思想論』のような本は私に大きな感銘を与えてくれたし、民族や歴史についての考えの基礎になったのは否めない。(中略)

124) 金相圭・「2年半の回想」、建国大学在韓同窓会編、『歡喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、59頁。

125) 安光鎬・「満洲建国大学」、建国大学在韓同窓会編、『歡喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、3頁。

126) 前掲と同じ。

127) 崔南善、建国大学教授

128) 閔機植(新三期)、在学中に「野村英治」と称され、戦後陸軍参謀総長、国会議員として歴任していた。

1941 年 12 月初め、崔南善先生の宅を訪問したことがあった。(中略) 先生は『日本はもうすぐ亡ぼされる。その時まで、体を大事にしながら待ちなさい。』『これからは道義が不道義に勝つ。正義が不正社会に勝って、正義国家が不正国家を打倒するようになるから、これこそが正しい歴史になることだろう!』とおっしゃっていた。また、日本がアメリカと戦争を始めた日<sup>129)</sup>、『アメリカが勝って日本が負ける。それで、我が国は独立するだろう。』ともおっしゃっていた<sup>130)</sup>。

戦後韓国で陸軍中將にまで昇進し、国務総理に就任した姜英勳<sup>131)</sup>も、崔南善先生と面談した経験を語った。「ちょうど官舎にいらっしゃった先生は、うれしく迎えてくださった。一言あいさつをした後、私は率直に心情を吐露した。先生は私の話を聞いた後、『どんな事業でも時間的要素が大事だ。民族更生も同じで、その時期が来るように、あるいは、その時期を作るように、我々は今、可能な限り最善を尽くすしかない。』と静かにおっしゃった。私は若さで血気にはやり、先生と論争でもするかのように、『先生のような民族指揮者たちが、そんなことをおっしゃるから、わが民族は永遠に回生できないのです。自分も知らないうちにドロ沼へ溺れてしまいます。』と無理なことを言った。先生は声を高くして、『では、どうしろうというのだ? 万一、我慢できないなら、我らを苦しめている日本人たちを、お前が殺せるだけ殺して、お前も死ね!』と一喝された<sup>132)</sup>。

その四：学徒出陣の経験。

建国大学の朝鮮人学生 1 期・2 期・3 期生は日本軍の学徒兵の経験があった。彼らの中では、終戦後も朝鮮戦争に参戦した学生も多かった。その際の経験と思想的経緯について、彼らは回想文で説明している。

---

129) 1941 年 12 月 7 日

130) 関機植・「建国大学と指揮官」、建国大学在韓同窓会編、『歎喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986 年、44-49 頁。

131) 姜英勳、在学中「竹山英勳」と称され、戦後韓国で陸軍中將に昇進し、国務総理にも任ぜられた。

132) 姜英勳(新三期)・「記憶に残る恩師・六堂先生のお話」、建国大学在韓同窓会編、『歎喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986 年、40-43 頁。

例えば、戦後陸軍参謀総長、国会議員を歴任した朝鮮人学生関機植の回想によれば、彼は学徒出陣に参加し、終戦後も軍隊で勤務した。「我々は1944年に学徒出陣したが、崔日龍学友(3期)と私は関東軍で同じ大隊にいて、(中略)125連隊第3大隊機関銃中隊で訓練を受けていた時には、隣の中隊に現在はソウル大学の教授である陳元重(3期)と朴魯璿がいて、また別の中隊には呉昌祿(2期)と何人かの韓国人学徒兵がいた。(中略)1950年6・25がおきた時、私は歩兵学校の校長をしていたが、歩兵学校というのは陸軍士官学校と陸軍参謀学校とならんでわが陸軍の3大学校である」<sup>133)</sup>。彼は、満洲経験が自分の人生に与えた影響について次のように述べている。「満洲事変・中日戦争・太平洋戦争などなど、1945年に大きな世界戦争は終わった。その結果、日本は韓国から去り、日本に占領されていた満洲も中国に吸収されるという大きな変化を迎えたのである。わが国は解放と同時に南北に分断され、独立以降は共産軍が南侵してきて、1950年6月25日にはわが民族にはとても残酷な6・25事変が起きた。(中略)こうして国家が潰れたり再興したり、弱小民族が解放されたり分断されたり、同じ民族同士で戦争したり、無慮35年をこんなふうにごしてきて、休戦後現在に至るまで30年間の戦闘ない対立状態で過ごしてきた」<sup>134)</sup>。

同じ頃勤労奉仕と学徒出陣に参加した朴熙晟は、軍事訓練の途中で遭遇した事を次のように回想している。「(1944年)10月下旬に延吉の陸軍部隊で軍事訓練を受けた。たくましい韓国婦人が頭の上に大きな荷物をのせ、背中に子供をおんぶして、両手に荷物を持って歩いていくのを見たが、それは数え切れないほどたくさんのものを背負った受難の韓国人を象徴しているようで胸が痛かった」<sup>135)</sup>。

---

133) 前掲と同じ。

134) 前掲と同じ。

135) 朴熙晟、「建大生活の回想」、建国大学在韓同窓会編、『歎喜嶺・満洲建国大学在韓同窓文集』、1986年、65頁。

## 結論

本論文は、満洲日系高等教育機関の戦後同窓会および同窓生の「満洲記憶」の形成と変容を分析し、さらに彼らが、それぞれの国と集団に属しながら、国交回復、国際交流の分野で活躍した原因を考察することを目的としている。本論文では、歴史的事実として存在していた満洲日系高等教育機関に対する、異なる時期、異なる集団における記憶の再構成を分析し、「戦後同窓会」は、それらの集団の記憶が発生する場所であると位置付けた。本論文は、それを検討する過程では、モーリス・アルヴァックスの「集合的記憶」理論及びピエール・ノラの「記憶の場」など関連する歴史社会学的理論を考察した。日系高等教育機関の卒業生の「満洲経験」については、同窓会会報と会誌、塾生日記、回想録、同窓会回想文集などの私家版史料を引用して、同窓生から生み出された「満洲記憶」の発生とその記憶の再構成の過程を分析した。そして、同窓生の「再構成された記憶」が時代と社会に及ぼす影響を歴史社会学的に考察している。

本報告の第一の結論は「同窓会」が「満洲経験」の一つの「記憶の場」であったということである。ノラの「記憶の場」理論によれば、記憶が発生しうる場所はまず出来事を表現する「遺物」である。それは、歴史の波に巻き込まれた集団によって設立され、確立され、構築され、決定され、維持されている。例えば、博物館、アーカイブ、墓、記念品、記念日、祭り、契約書、会議の記録、記念碑、寺院などはすべて、過ぎた昔の永遠の幻覚の証人である。戦後、旧満洲日系高等教育機関の同窓生は、あたかもその「変遷と更新している歴史の波に巻き込まれた集団」のカテゴリーに属した。従って、戦後同窓会が主催した一連の記念活動は、ノラが語る懐かしい感情を満たした「無儀式的な社会儀式」に沿ったものであり、戦後同窓会は、「満洲経験」の象徴として、日系同窓生に帰属感とアイデンティティを与えた。

満洲日系高等教育機関の戦後同窓会は、日本側の同窓生によって運営され、例会だけでなく、幹部の選出、会費の明細の発表、同窓生の名簿の作成と更新なども行った。日常の運営や組織形態だけでなく、慰霊祭、寮歌祭、旧満

洲を中心とした訪中団、周年記念日などの祝い事や記念活動はすべて、同窓会自体が「記憶の場」として、満洲記憶を保護し守る機能を有したことを示している。しかし、日本人同窓生のみが定期的に活動する戦後同窓会を創設し、中国人同窓生・韓国人同窓生は自らの恒常的な同窓会を組織することはなかった。日本における戦後同窓会という「記憶の場」には、当然のことながら、日本人学生のための「満洲記憶」が現われることとなった。

本稿の第二の結論は、同窓会が個々の同窓生集団の満洲経験による「集合的記憶」を形成する条件を与えたことである。戦後満洲日系高等教育機関の戦後同窓会を考察してみると、満洲経験に関する記述、および各国の同窓生集団と日本同窓会との何十年にもわたる交流活動の内容と形式が「集団的記憶」の理論に非常によく当てはまる。この範疇に従って、所属組織別の同窓会会報・会誌、回想文集を考察すると、すべて特定の集合的記憶を反映しているといえる。同窓生が異なる「集団」に分割されると、個々の集団が異なる「記憶」を持つことを示している。このような多様な「集団」は、それぞれに歴史的事実と特定の性格の「記憶」を「再構成」した。このことが満洲経験に複数の解釈をもたらす。さまざまな国や地域の同窓生が「反満抗日運動」、「勤労奉仕」など特定の歴史的事実、および建国大学の学長・教授などの特定の人物に対して異なる態度を抱いていることを考察した。

本稿の第三の結論は、「集合的記憶」を生み出す集団は、再編成されうる、という事実である。日中国交正常化(1972年)と共に、1970年代後半から建国大学の中国人同窓が建国大学戦後同窓会の活動に積極的に参加するようになった。中国同窓は、子供たちを日本に留学させたり、海外交流活動を行ったりすることで、日本同窓とのネットワークを強化した。中国側からの日本との文化的交流、さらには経済的協力の要請もかなり盛んであった。しかし、1990年代後半に、主として建国大学の中国人同窓生によって書かれた回想文集では、10年前の記憶が失われたかのように、建国大学および満洲記憶が否定的に評価され、日本人同窓との関係も疎遠になってしまった。一方で新京工科大学や旅順工科大学などの理科系の大学では、一部の中国人同窓は在学時から「延安派」に加わり、解放後に中国東北部の軍事工場の接

取活動などに直接的に参加したため、戦後には逆に、中国同窓としてよりも実務家として、日本側との関係を築くために日本同窓会と連絡を取り合い、政府と協力しつつ交流活動を行った。

本報告の第四の結論は、同窓会における「集合的記憶」が時代とともに変化したことである。戦後同窓会の活動や同窓会が刊行する一連の資料などは、同窓会集団の社会的記憶と同等である。これとは対照的に、個人の回想録は、個人的な思い出を示している。従って、戦後の満洲における日本の高等教育機関の同窓会の形成と活動の過程において、歴史的状況の変化と発展に伴い、同窓生の集団が変化すると「集合的記憶」も変化した。「集合的記憶」の「再構成」は、満洲記憶の変容をもたらした。日中国交正常化（1972年）と日韓国交回復（1965年）を前後して、1960–1970年代、同窓会の活動は日本から海外へと拡大した。中国と韓国の同窓生は日本同窓生との関係を再確立し、戦後同窓会の同窓生集団にも変化をもたらした。この時、同窓会における議論を通じて、満洲経験の評価は、中国人と韓国人の同窓生が承認しうる歴史的観点に近づくことになった。そして、同窓会によって組織された韓国と中国への訪問は、各国の同窓生のネットワークを再構築する一方、同窓生集団の変容と満洲記憶の再構築に貢献した。

本稿の第五の結論は、同窓会の集合的記憶が特定の社会の集合的意識で「再発見」されることが可能である、ということである。建国大学の中国人同窓生の場合、彼らの在学中の「反満抗日運動」は、中華人民共和国建国後の中国社会の日中戦争に対する価値志向すなわち公的記述に適合したため、1990年代には中国政府の所属機関による建国大学に関する回想文集が出版され、それにより中国の同窓生の記憶は「再発見」されたといえる。

本稿の第六の結論は、「記憶の場」は、ある伝統に生きる個人が所属意識を見出す事ができる、つまり社会的集団の一員となる可能性を実感できるシステムである、ということである。そして人々はそこで学び、思い出し、ある文化を共有する。同窓生、特に海外の同窓生は、戦後同窓会に参加し、そこで母校の歴史を学び、覚え、母校の伝統を文化として共有する。集団が物理的に消散してすべてのメンバーが去っても、その過去の経験が伝統とし

て記憶される。たとえば、戦後同窓会の解散後におこなわれたインタビューにおいても、異なる出身地の同窓生が個々の経験にもとづいた自らの「満洲記憶」を有する一方、同窓生として共通する「誇り」と建国大学の伝統に対する懐古が見られた。この記憶のシステムは、異なる集団間での差異を反映しながら、共通認識を形成していった。

最後に、戦後数十年の日本と近隣諸国との友好関係の樹立と発展に際し、同窓会が大きな貢献をなしたことを検討した。同窓会自体が満洲経験を表現する「記憶の場」として機能し、数十年続くその記念機能により、さまざまな社会で同窓生に満洲経験の「集会的記憶」を呼び起こす役割を果たしていた。この「記憶の場」が存在できたのは、戦後数十年にわたる日系戦後同窓会が中断せずに継続して活動したためである。満洲経験のこの「記憶の場」は、さまざまな国や地域の同窓生の「集会的記憶」の変容をマクロなレベルで促進し、「再構成された満洲記憶」は、異なる、または敵対的な立場にあった同窓生を助けて、新しい時代、新しい社会に適合し、新しいつながりを生み出した。このようなつながりは、かつて日中、日韓の間の国際関係に、民間の分野での良好な相互作用と雰囲気をもたらした。

(かん・みい = 本学民俗学研究所研究員)

## 文献目録

蘭桜会福岡支部『支部便り』No.3

新京工業大学応用化学科化人会『化人』復刊号—No.12 1977—1997年

新京工業大学応用化学科化人会『化人会報』No.1-55 1984—2003年

新京工業大学応用化学科化人会『母校創立60周年校友聯誼会参加訪中団感想文集』

『機友会 会員通信抄』No.1-16 1991—1999年

『新京工業大学同窓会「蘭桜会」結成50周年記念誌 北辰高く—青春の新京時代と追想の日々』1998年12月

採鉱三期会 会報『杏花』No.1-10 1994—2004年

新京工業大学卒業生鈴木作良君句集刊行会 回想録『桜』1983年

旅順工科大学同窓会編、『旅順』、51-136号 1966—2010年

旅順工科大学興亜雑誌部編、『うづら』、1938-1943 年  
旅順工科大学同窓会六十年史編纂委員会編、『旅順の日』1973 年  
旅順工科大学同窓会編、『旅順工科大学開学 90 周年記念 平和の鐘』2000 年  
興亜技術同志会編、『興亜』1931-1943 年  
興亜技術同志会編、『興亜』No.24-49 1955-1965 年  
掉尾会文集編集委員会『掉尾を飾る—最後の旅順工科大学予科生の記録』1990 年

建国大学同窓会編『建国大学史資料』創刊号—第 5 号 1966-1971 年  
建国大学同窓会編『建国大学同窓会会報』No.1-56 1954-1956 年  
建国大学同窓会編『歓喜嶺 1980 年』建国大学同窓会 1980 年  
建国大学同窓会編『歓喜嶺遙か』上下 建国大学同窓会 1991 年  
建国大学同窓会編『写真集 建国大学』建国大学同窓会 1986 年  
建国大学同窓会編『日本での歩み』非売品 2007 年  
建国大学同窓会編(続)『幻の学園・建国大学抗日曲折行—建国大学を出てから』聶長林 記；  
岩崎宏 日本校訂 2000 年

建国大学 1 期生会『会報』No.1 1958 年 7 月  
建国大学 1 期生会『歓喜嶺 建国大学一期生文集』建国大学 1 期生会 1989 年  
建国大学 2 期会編『二期』建国大学 2 期会 1989 年  
建国大学 3 期会編『建国大学三期会会報』1-42 号 1948-1995 年  
建国大学 4 期会編『楊柳』建国大学 4 期会報 1-27 号 1948-1995 年  
建国大学 6 期生文集『曙さざす』1981、1986 年  
建国大学 9 期生刊行世話人会『建国大学 9 期生』1995 年  
作田荘一『道を求めて』(自伝) 作田荘一『道の言葉』全 6 巻第 6 巻 京都『道の言葉』刊行  
会 1963 年  
藤井歆一著 湯治万蔵編『ひたぶるに、真実に (藤井歆一建国大学日記抄、その他)』非売品  
1992 年

建国大学同窓会編『同学連歆 1』1993 年  
建国大学同窓会編『同学連歆 2』1997 年  
建国大学 7・8 期会編『八期』建国大学 7・8 期会報 1-10 号 1978-1988 年  
建国大学 7 期会編『朋友們』建国大学 7 期生会会報 創刊号—第 5 号 1990-1996 年  
湯治万蔵『建国大学年表』建国大学同窓会建国大学史編纂委員会 1981 年  
山田昌治『興亡の嵐—建国大学崩壊の手記』かんき出版 1980 年

大同学院史編纂委員会編『碧空緑野三千里』大同学院同窓会 1972 年；  
大同学院史編纂委員会編『大いなる哉、満洲』  
大同学院史編纂委員会編『旺なる吾等』  
大同学院史編纂委員会編『渺茫としても果てもなし—満洲国大同学院創設五十年』1987 年  
大同学院同窓会編『友情の架橋・海外同窓の記録—満洲国大同学院創設五十五年記念』  
1986 年  
大同学院同窓会編『久遠—創設六十年記念』1999 年  
大同学院同窓会編『物語 大同学院・民族協和の夢にかけた男たち—創設七十周年記念』創  
林社 2002 年  
大同学院 6 期生回想録編纂委員会『大同学院 6 期生回想録』1972 年

ハルビン工業大学同窓会『ハルビン工業大学写真集』非売品  
ハルビン工業大学採鉱・冶金学科同窓会『ハルビン工業大学採鉱・冶金同窓会会報』  
ハルビン工業大学採冶学科同窓会『ハルビン工大採冶会誌』No.1-4 1991-1995年

長春市政协文史資料委員会『回忆伪滿国建国大学』1996年  
長春工業大学『長春工業大学校友紀事』1996年  
長春市政协文史資料委員会『回忆伪滿新京工業大学』1994年

満洲医科大学一覽 1934年  
満洲医科大学輔仁会編『輔仁』No.55-64 1977-1985年  
『柳絮地に舞ふ（追補）—戦後の輔仁会』1984年  
『鴉群』No.1-3 1973-1975年 No.55-59 1995-1998年  
輔仁会編：『満洲医科大学40周年記念誌』1952年  
『満洲医科大学開学70周年祝典』1980年

満洲国立佳木斯医科大学同窓会編『万里雲濤—満洲国立佳木斯医科大学記念文集』1980年  
満洲国立佳木斯医科大学同窓会編『満洲国立佳木斯医科大学記念資料集』1978年  
\* 蘭仁会<sup>136)</sup>  
蘭仁会『蘭仁会史』非売品 1981年

・同時代文献

赤木光次郎（編）建国大学研究院月報、（創刊号、第2、4-7、9-12、14、16、17、22、23、25、26、28、29号）1940-1943年  
建國大學塾（編）『建國大學塾月報』、1942-1943年  
建國大學塾（編）『黎明；建國大學塾第十四塾塾雜誌』、1-5号、発行年月日不明  
建国大学（編）『興京二道河子旧老城』、1939年  
大同学院同窓会（編）『大同学院名簿』、1944年

・日記

森崎湊『遺書』（図書出版社、1971年）。  
藤井敏一『ひたぶるに真実に：藤井敏一建国大学日記抄 その他』（藤井諄一、1992年）

・回想録

河田宏『満洲建国大学物語：時代を引き受けようとした若者たち』（原書房、2002年）  
小川之夫『愚直の青春二、一二八日 ハルビン学院—シベリア分校に学んで』（恵雅堂出版株式会社、1988年）  
小林金三『白塔：満洲国建国大学』（新人物往来社、2002年）  
後藤春吉編『師弟愛は民族を越えて—清水三三随筆集 ほか—』（清水巖発行、1984年）

---

136) 蘭仁会は、満洲国国立大学チチハル開拓医学院、満洲国国立大学ハルビン開拓医学院、満洲国国立大学北安開拓医学院、満洲国国立大学龍井開拓医学院の4学院の教職員及入学者によって結成されている会である。

孫平化『中日友好随想録(上)(下) — 孫平化が記録する中日関係』武吉次朗訳(日本経済新聞出版社 2012 年)

孫平化『日本との 30 年—中日友好随想録』安藤彦太郎(講談社、1987 年)。百々和『道芝折々の記』(三和書房、2007 年)

西村十郎『楽久我記：満洲建国大学わが学生時代の思い出』(宝塚：西村十郎、1991 年)

齊木道吉『苦楽人生：回首往時』(建国大学同窓会、2007 年)

洪椿植『旧満洲国建国大学出身の韓国人洪椿植が語るハンキョレ(はらから)の世界』(洪椿植、1999 年)

前川恵司『帰郷：満洲建国大学朝鮮人学徒青春と戦争』(三一書房、2008 年)

水口春喜『大いなる幻影：満洲・建国大学』(光陽出版社、1998 年)

聶長林『続「幻の学園・建国大学」抗日曲折行：建国大学を出てから/聶長林記』(学伸社、2000 年)

山田昌治『興亡の嵐：満洲・建国大学崩壊の手記』(かんき出版、1980 年)

梁世勳『ある韓国外交官の戦後史—旧満洲「新京」からオソまで』梁秀智訳(鈴さわ書店、2007 年)

#### 私家版史料

建国大学一期会(編)『建国大学一期会会報』、1958 年

建国大学学友誌編集委員会(編)『二期文集(続編)：建国大学第二期同学学友誌』、2001 年  
建国大学五期生会誌編集委員会(編)『楊柳(どろやなぎ)：建国大学五期生会誌』、1959–1981 年

建国大学三喜会会誌編集委員会(編)『建国大学三期会会報』、1948–1962 年

建国大学三喜会会誌編集委員会(編)『三喜会会誌』、1959–1982 年

建国大学新三期会(編)『建国大学元期会会報；建国大学新三期会会報』、1982–1985 年

建国大学同窓会・建国大学史編纂委員会(編)『建国大学史資料』、1966–1975 年

建国大学同窓会 藤森孝一、鈴木昭治郎編『建国大学年表要覧』、2007 年

建国大学同窓会(編)『一心会会員名簿：康徳十年十一月現在』、1943 年、建国大学同窓会  
新京本部

建国大学同窓会(編)『歓喜嶺遙か：建国大学同窓会文集』、1991 年

建国大学同窓会(編)『建国大学同窓会会報』、1954–2010 年

建国大学同窓会(編)『建国大学同窓生名簿』、1952–1998 年

建国大学同窓会(編)『建国大学同窓会日本での歩み』、2007 年

建国大学同窓会(編)『同学聯歡』、1993–1997 年

建国大学同窓会(編)『回想建国大学：中国学生の手記』、2006 年

建国大学同窓会(編訳)『歓喜嶺：満洲建国大学在韓同窓文集(日訳)』、2004 年

建国大学七期生会誌編集委員会(編)『朋友們』、1991–2005 年

建国大学二期会記念誌編集委員会(編)『二期：建国大学入学五十年記念誌』、1989 年

建国大学四期生会誌編集委員会(編)『楊柳(どろやなぎ)』、1991–2009 年

建国大学四期生同期会誌編集部(編)『慢慢的』、1959–1977 年

興亜技術同志会(編)『興亜』、第 20–50 号、1954–1966 年

20(1954.10)、21(1955.1)、24(1956.1)、25(1956.5)、26(1956.10)、28(1957.6)、30(1957.11)、  
32(1958.8)、33(1958.11)、34(1959.1)、35(1959.6)、38(1960.6)、39(1960.10)、40(1961.1)、

41(1961.7)、42(1962.1)、43(1962.6)、44(1963.2)、46(1964.1)、47(1964.7)、48(1965.1)、49(1965.9)、50(1966.1)

国立大学ハルビン学院同窓会編『ハルビン学院史(1920-1945)』、1987年  
国立大学ハルビン学院同窓会編『ハルビン学院物語—ハルビン学院史補遺』、1995年  
国立新京工業大学—中国人学生の記録—、1997年

新京工業大学同窓会「長春工業大学中国校友記事」翻訳委員会 中村孝訳『旧「満洲」  
新京法政大学同窓会到草会(編)『南嶺慕情』、1994年

福守一男(編)『曙さざす: 建国大学七期生文集』、1981年  
福守一男(編)『曙さざす: 建国大学六期生文集』、1986年

旅順工大同窓会(編)『平和の鐘—旅順工科大学開学九十周年記念誌』、2000年  
旅順工大同窓会(編)『旅順の日—旅順工大創立六十周年記念誌』、1970年

・刊行史料

外務省アジア局中国課監修『日中関係基本資料集 1949-1997年』(霞山会、1998年)  
建国大学同窓会(編)(湯治万蔵主編)『建国大学年表』、1976年

・歴史学研究文献

大類善啓『ある華僑の戦後日中関係史—日中交流のはざまに生きた韓慶愈』(明石書店、2014年)

佐藤量『戦後日中関係と同窓会』(彩流社、2016年)

竹中憲一『大連、アカシアの学窓—証言、植民地教育に抗して』(明石書店、2003年)

田嶋信雄『ナチズム外交と「満洲国」』(千倉書房、1992年)

田中恒次郎『満洲における反満抗日運動の研究』(1997年)

中嶋毅「ハルビン法科大学小史(1920-1937)—中国在住ロシア人の知的空間(上)(下)『思想』(上)(952)62-82、(下)(953)147-166 2003年

橋本学「日中戦争期・中国の高等教育に関する一考察—国民党治下における高等教育機関の動向を中心に」大学論集 / 広島大学高等教育研究開発センター編(通号26)1996 p.63-91 東広島: 広島大学高等教育研究開発センター。

服部龍二『日中国交正常化—田中角栄、大平正芳、官僚たちの挑戦』(中公新書、2011年)

浜口裕子『満洲国留日学生の日中関係史: 満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』(勁草書房、2015年)

ピーティ、マーク・R、大塚健洋、関静雄、大塚優子訳『「日米対決」と石原莞爾』(たまいらば、1993年)

松浦正孝(編)『アジア主義は何を語るのか: 記憶・権力・価値』(ミネルヴァ書房 2013年)

三浦英之『五色の虹』(集英社、2015)

矢内原忠雄『満洲問題』(岩波書店、1934年)

山根幸夫『建国大学の研究: 日本帝国主義の一断面』(汲古書院、2003年)

山室信一『キメラ—満洲国の肖像 増補版』(中公新書、2004年)

Duara, *Prasenjit Sovereignty and Authenticity: Manchukuo and the East Asian Modern*, Oxford, Rowman & Littlefield, 2004.

Sewell, Bill ., *Constructing Empire: The Japanese in Changchun, 1905-45*, University of British Columbia Press, 2019.

林志宏, 《地方分權與「自治」——滿洲國的建立及日本支配》, 黃自進、潘光哲主編, 《近代中日關係史新論》(新北: 稻鄉出版社, 2017), 643-683 頁

林志宏, 《惲毓鼎澄齋日記》所見清移民的政治認同, 《兩岸發展史研究》第二期, 229-246 頁, 2006 年 12 月, 國立中央大學歷史研究所

林志宏, 《口述歷史及其侷限: 以戰後接收東北的回憶為例》, 《東吳歷史學報》, 第三十六期, 71-105 頁, 2016 年 12 月

林志宏, 《王道樂土—清遺民的情感抵制和參與「滿洲國」》, 《新史學》, 第十八卷第三期, 2007 年 9 月

정상우 (Jeong Sangwoo), 식민주의 역사학으로서 만주건국대학에서의 역사 연구 (A Study on the History in Manchu Genkoku University as the Historiography of Colonialism) *동북아역사논총 (Dongbuga Yeoksa Nonchong)* (64), 2019.6, 125-169

윤명숙, 중국 당안관 자료 현황과 자료 해제 일본군 위안부 자료를 중심으로 동북아역사논총 (中国档案馆資料現狀と資料解除: 従軍慰安婦問題を中心にする) (*Dongbuga Yeoksa Nonchong*) (59), 2018.3, 232-252

李東振 해방 직후 長春의 조선인 一 기억과 정치 사이 大東文化研究 제 83 집 (解放直後長春의 朝鮮人——記憶と政治の間, 大東文化研究第 83 輯)

• 社会科学研究文献

アスマン、アライダ、安川晴基訳『想起の文化—忘却から対話へ』(岩波書店、2019年)

アルヴァックス、モーリス、小関藤一郎訳『集合的記憶』(行路社、1989年)

石田雄『記憶と忘却の政治学—同化政策・戦争責任・集合的記憶』(明石書店、2000年)

岩崎稔・成田龍一・島村輝『アジアの戦争と記憶—二〇世紀の歴史と文学』(勉誠出版、2018年)

黄順姬『同窓会の社会学—学校的身体文化・信頼・ネットワーク』(世界思想社、2007年)  
Anderson, Benedict, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London. New York, 1983

Erl, Astrid, translated by Sara B. Young, *Memory in Culture*, Palgrave Macmillan, 2011

Huntington, Samuel P. *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, New York, 1996